

京都大学 学生生活白書

平成27年度《学生生活実態調査》の
まとめ - 概要 -

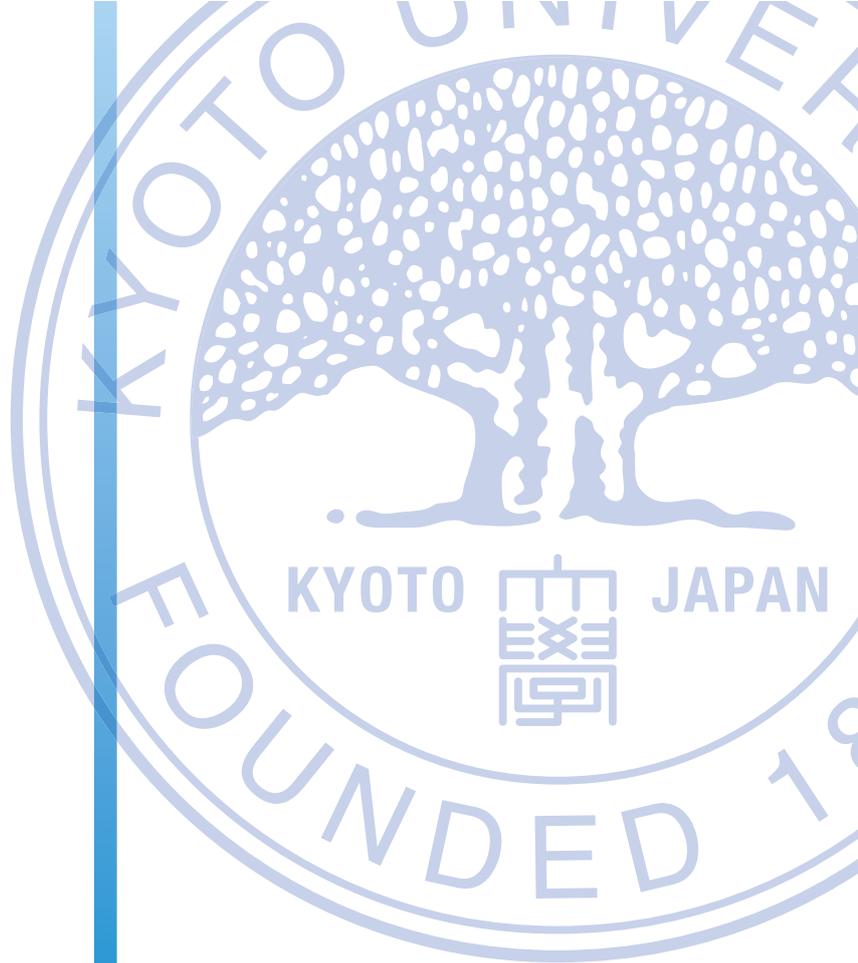
Kyoto University Campus Life 2015



目 次

| | |
|----------------------------|----|
| A. 調査に協力してくれた人たち | 1 |
| B. 学内施設の利用 | 1 |
| C. 入学・学業 | 3 |
| D. 課外活動 (サークル・ボランティア活動) | 6 |
| E. 旅行について | 9 |
| F. 健康・悩み等 | 10 |
| G. 進路(進学・就職) | 12 |
| H. 家庭状況 | 13 |
| I. 住居と通学 | 15 |
| J. 生活費の状況 | 17 |
| K. アルバイト | 19 |
| L. 食事 | 21 |
| M. 耐久消費財について | 23 |
| N. その他 | 24 |

- ※ 本書では調査結果を小数点第2位で四捨五入し、小数点第1位までの表記としています。したがってグラフの数字を合計しても100.0%にならない場合や合計欄の数字にならない場合があります。また、過去の白書から引用した数字は小数点第1位で四捨五入されているものもあります。
- ※ 文中の数字は無回答、設問非該当を除いている場合がありますので、必ずしも表・グラフの数字とは一致しません。
- ※ 便宜上、原則として学部生は学部、大学院生は課程別に修士・博士・専門職と表記しています。



A. 調査に協力してくれた人たち

京都大学の学部と大学院に在籍する学生を対象に学生生活の実態を把握し、キャンパス全般の環境整備に役立てるため、昭和28年以降『学生生活実態調査』を実施しています。

平成28年1月、京都大学に在籍する学部13,125人、大学院7,752人を対象に、Webアンケートシステムを利用したアンケートを実施し、それぞれ、1,035人、1,317人（合計2,352人、回答率11.3%）から回答を得ました。調査に協力して貴重な回答と意見をいただいた学生諸君に感謝いたします。



所属学部・研究科毎の回答者割合

| 学部・大学院 | 学部 | 修士 | 博士 | 専門職 | 合計 |
|------------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 総合人間学部・人間・環境学研究科 | 30 | 50 | 32 | | 112 |
| 文学部・文学研究科 | 85 | 34 | 27 | | 146 |
| 教育学部・教育学研究科 | 26 | 24 | 25 | | 75 |
| 法学部・法学研究科 | 91 | 6 | 9 | | 106 |
| 経済学部・経済学研究科 | 43 | 7 | 9 | | 59 |
| 理学部・理学研究科 | 204 | 95 | 69 | | 368 |
| 医学部・医学研究科 | 101 | 27 | 95 | 19 | 242 |
| 薬学部・薬学研究科 | 75 | 32 | 27 | | 134 |
| 工学部・工学研究科 | 285 | 225 | 80 | | 590 |
| 農学部・農学研究科 | 95 | 83 | 26 | | 204 |
| エネルギー科学研究科 | | 84 | 16 | | 100 |
| アジア・アフリカ地域研究研究科 | | | 12 | | 12 |
| 情報学研究科 | | 58 | 12 | | 70 |
| 生命科学研究科 | | 26 | 14 | | 40 |
| 地球環境学学舎 | | 12 | 6 | | 18 |
| 総合生存学館 | | | 4 | | 4 |
| 法科大学院 | | | | 14 | 14 |
| 公共政策教育部 | | | | 26 | 26 |
| 経営管理教育部 | | | | 32 | 32 |
| 合計(人) | 1,035 | 763 | 463 | 91 | 2,352 |
| 回収率(%) | 7.9% | 17.8% | 16.1% | 15.2% | 11.3% |

※アジア・アフリカ地域研究研究科、総合生存学館は、5年一貫制のため、博士に算入。

B. 学内施設の利用

◆ 生協施設への依存と満足度 ◆

京大生がもっとも頻繁に活用する学内施設は、生協購買部と生協食堂である。生協購買部については《ほとんど毎日利用する》と《週に2～3回程度利用する》を合わせると、5割を超えるが、7割近くに及んでいた前回調査よりも減少している。生協食堂についても《週に2～3回程度利用する》以上の頻度で利用する者が6割近くあるが、前回の7割近くよりも減少している。この割合は宇治では8割、桂キャンパスでは7割を超えており、これらのキャンパスでは前回と同様である。一方、生協食堂は平均満足度において他の学内施設に比べて格段高いわけではないが、特に低いともいえない。各キャンパスに最近増えているカフェやレストランの利用頻度は、学部・大学院ともに高くないが、満足度としては高い傾向にある。学生の要望としては安価な食事が快適に提供されることを望んでいるが、時にはカフェやレストランで食事を楽しみたい傾向も見てとれる。

◆ 学部と専門職の学習の場としての図書館 ◆

附属図書館については、《ほとんど毎日利用する》と《週に2～3回程度利用する》を合わせたものは、全体では2割弱、学部と専門職では25%程度であり、前回調査と比べると附属図書館の利用頻度が低下している。修士、博士、あるいは吉田キャンパス以外の学生では1割未満であり、学部と専門職のための学習場所としての利用を反映していると思われる。附属図書館の満足度は3.84と高く、開館時間の延長や24時間利用できる学習室24などのサービス向上が引き続き功を奏していると考えられるが、前回の4.09という満足度と比較するとやや低下した。

各学部の図書館利用については、《ほとんど毎日利用する》と《週に2～3回程度利用する》を合わせたものは、15%程度であるが、ここでも学部と専門職ではそれよりもやや高く、2割近い割合を示している。

総合体育館、総合博物館などの施設については著しく利用者は少ない。総合体育館や運動グラウンドについてはクラブ活動で占有されているが、一般の学生も使用できるようにしてほしいという要望も少なからず見られる。

保健診療所は必要に応じて活用されており、《年に数回利用する》という回答が約16%を占める。キャリアサポートセンターの利用は全体で11.4%と前回の16.8%から減少しているが、修士では27.1%が利用しており、前回までとほぼ同様に、他の課程の倍以上となっている。他の学内施設も含めて満足度は総じて3～4の範囲にあり、一定の満足は得られているようである。

施設毎の利用頻度と平均満足度

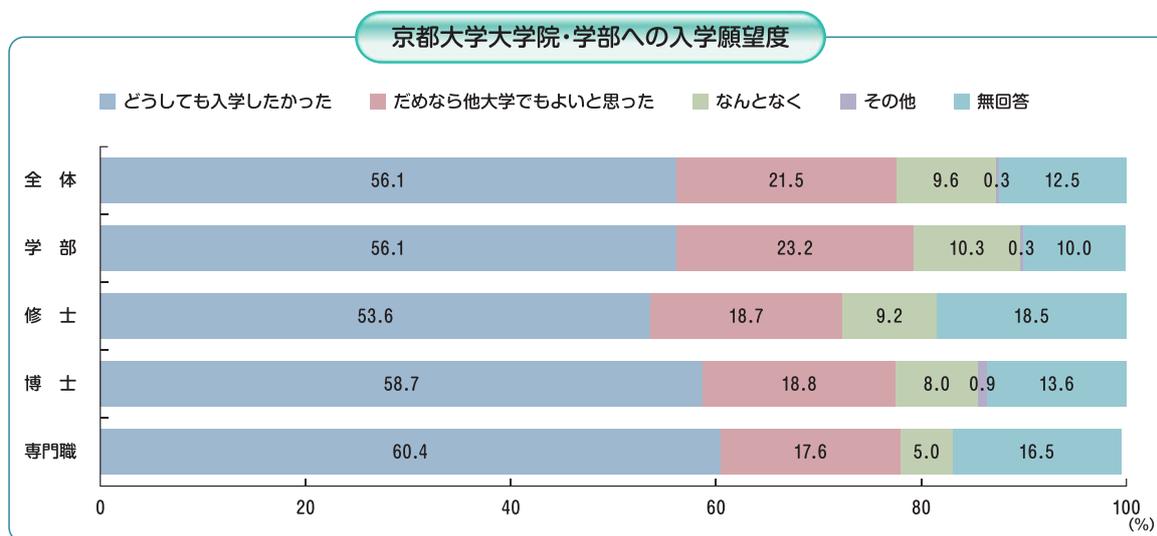
| 区分 | 学内施設の利用頻度 (単位: %) | | | | | | | 学内施設を利用している平均満足度 (5段階評価) (単位: 点) | |
|----------|-------------------|------------|------------|----------|-----------|---------|------|----------------------------------|------|
| | ほとんど毎日利用 | 週に2～3回程度利用 | 月に2～3回程度利用 | 年に数回程度利用 | まったく利用しない | 存在を知らない | 無回答 | | |
| 情報源となる施設 | 附属図書館 (総合図書館) | 3.6 | 15.6 | 26.2 | 32.8 | 10.4 | 0.1 | 11.3 | 3.84 |
| | 学部等の図書館・図書室・資料室 | 2.2 | 12.3 | 24.7 | 32.6 | 16.0 | 0.6 | 11.5 | 3.71 |
| | 学術情報メディアセンター南館 | 0.3 | 4.3 | 12.1 | 25.5 | 43.3 | 3.0 | 11.5 | 3.53 |
| | 総合博物館 | 0.1 | 0.4 | 1.0 | 21.3 | 67.5 | 9.4 | 0.3 | 3.71 |
| 支援施設 | 健康科学センター | 0.1 | 0.1 | 0.3 | 5.5 | 44.1 | 49.6 | 0.4 | 3.55 |
| | カウンセリングセンター | 0.1 | 0.1 | 1.0 | 3.6 | 54.7 | 28.8 | 11.6 | 3.88 |
| | 保健診療所 | 0.1 | 0.1 | 0.2 | 16.4 | 50.8 | 20.6 | 11.9 | 3.64 |
| | キャリアサポートセンター | 0.0 | 0.2 | 1.7 | 9.5 | 50.5 | 26.3 | 11.8 | 3.56 |
| | 女性研究者支援センター | 0.1 | 0.1 | 0.1 | 0.3 | 34.8 | 53.0 | 11.7 | 3.83 |
| スポーツ等施設 | 総合体育館 | 1.4 | 4.2 | 5.7 | 11.6 | 59.4 | 5.9 | 11.8 | 3.35 |
| | 運動グラウンド | 2.8 | 0.9 | 1.6 | 4.9 | 72.8 | 5.4 | 11.7 | 3.72 |
| | スポーツ指導・相談室 | 0.0 | 0.1 | 0.1 | 0.2 | 32.6 | 55.0 | 12.0 | 4.01 |
| | クラブ・サークル部室 | 7.1 | 8.0 | 6.2 | 6.0 | 51.6 | 9.2 | 11.8 | 3.52 |
| 生協等関連施設 | 生協購買部 | 22.7 | 30.5 | 22.8 | 9.7 | 2.0 | 0.3 | 11.9 | 3.64 |
| | 生協食堂 | 34.2 | 23.1 | 14.7 | 11.8 | 4.1 | 0.2 | 11.9 | 3.64 |
| | カンフォーラ (吉田) | 0.1 | 0.8 | 5.3 | 40.8 | 38.8 | 2.5 | 11.7 | 3.83 |
| | ラ・トゥール (吉田) | 0.2 | 0.1 | 0.2 | 8.0 | 69.6 | 10.0 | 11.8 | 3.92 |
| | タリーズコーヒー (吉田) | 0.3 | 0.6 | 4.4 | 18.9 | 58.3 | 5.7 | 11.7 | 3.74 |
| | カフェレストランきはだ (宇治) | 0.1 | 0.0 | 0.2 | 2.5 | 23.9 | 61.5 | 11.9 | 3.80 |
| | ハーブムーンガーデン (桂) | 0.3 | 0.6 | 1.1 | 2.7 | 21.1 | 62.4 | 11.9 | 3.16 |
| | ラ・コリーヌ (桂) | 0.2 | 0.2 | 0.3 | 3.7 | 20.4 | 63.6 | 11.7 | 3.77 |
| | カフェテリアセレネ (桂) | 3.0 | 1.5 | 1.8 | 2.2 | 17.1 | 62.4 | 12.0 | 3.24 |
| | カフェアルテ (桂) | 0.4 | 0.6 | 1.1 | 3.0 | 19.1 | 63.9 | 11.8 | 3.26 |
| | ベーカリーカフェリニュー (桂) | 0.2 | 1.3 | 2.9 | 3.9 | 19.6 | 60.2 | 11.8 | 4.00 |

※上表最右列の「学内施設を利用している平均満足度」は、「とても満足している」=5点、「満足している」=4点、「普通」=3点、「不満である」=2点、「とても不満である」=1点として、5点満点で平均値を算出 (学内施設の利用頻度の設問に「まったく利用しない」「存在を知らない」とする回答者、及び、当該設問 (満足度) に対する無回答は、平均値計算の母数から除外)



◆ 5割以上がどうしても入学したかった ◆

《どうしても入学したかった》と回答した京大生は全体で56.1%と、前回及び前々回には6割を超えていたことと比べると低下した。内訳は、学部56.1%、修士53.6%、博士58.7%、専門職60.4%となっており、課程によって大きな差があるとまではいえない。前回までと比べると、専門職で前々回の47.5%及び前回の47.1%よりもかなり高くなっているが、それ以外の課程では前回よりも低くなった。特に博士では前回の73.0%から大きく低下したが、前々回の60.5%とほぼ同じ割合である。もっとも、《だめなら他の大学でもよいと思っていた》割合も、全体で21.5%であり、前回よりもやや低下した。専門職が前は41.2%と高かったが、今回は17.6%と大きく低下している。今回は、前回までと比べて無回答が多かったことに注意が必要である。



入学の動機は、《伝統や雰囲気にあこがれていた》が学部の第1位で23.9%となっており、前回の18.0%よりも上昇し、前々回の23.2%と同程度となった。修士は《就職前に深い専門的知識を身につけたかった》が前回と同様に第1位で15.6%となったが、前回の19.2%より低下した（ただし、無回答が多かった）。博士は、《スタッフ・設備が優れている》が前回・前々回同様1位であり29.4%であった。また専門職では、前々回は《将来の就職を考えて》、前回は《社会的評価が高い》がそれぞれ1位であったが、今回は、《スタッフ・設備が優れている》が24.2%で1位になっている。他に多く選ばれていたのは、学部では《社会的評価が高い》、修士では《伝統や雰囲気にあこがれていた》《スタッフ・設備が優れている》《社会的評価が高い》、博士では《伝統や雰囲気にあこがれていた》《就職前に深い専門的知識を身につけたかった》、専門職では《将来の就職を考えて》《伝統や雰囲気にあこがれていた》である。前回と前々回は、学部では京大ブランド、大学院では専門性等と入学動機が課程別に分化してきたと分析されていたが、今回は、大学院でも京大ブランドが入学動機のうち上位に現れている。

学部・学科等を選択する際に重視した点については、全課程で《自分の惹かれた学問分野であること》を第1位としているが、学部、修士及び博士はこれが他の事項に比べて圧倒的に多いのに対し、専門職は《社会のために役立つ分野》《教員に魅力を感じる》《将来希望する就職に必須》も一定の割合を占めている。専門職の場合には、一定の学問分野の専門的知識を修得することによる資格やその後の職業に目を向けた選択がされていることが読み取れる。

入学時に将来の進路を《決めていた》学生は、《ある程度決めていた》を含めると全体の49.7%であり、課程別には、学部48.8%、修士43.1%、博士59.8%、専門職67.1%となっている。

◆ 8割が満足 カリキュラムの消化困難がやや増加 ◆

在籍している学部・学科・専攻等への満足度については、《満足・ある程度満足》が全体では79.4%である。各課程では学部77.7%、修士82.3%、博士80.8%、専門職91.3%となっており、専門職では前回の79.4%を大きく上回ったが、その他の課程ではいずれも若干減少した。

学部生に対する「現行のカリキュラムに満足していますか」の問いでは、《満足・ある程度満足》が60.4%（前回55.6%）、《不満・あまり満足していない》が16.2%（前回20.3%）である。

また、学部生に対する「現行のカリキュラムは消化できますか」の問いでは、《できる・ある程度できる》が76.6%（前回82.0%）、《困難・あまりできない》が8.1%（前回6.3%）となっている。前回と大きな差はないが、満足度がやや上昇している一方で、カリキュラムの消化困難を感じる学生がやや増加している。現行カリキュラムへの改善要望では、《自分の意欲や努力が足りない》という回答と《カリキュラムの組み方に問題がある》という回答がいずれも20%前後で拮抗した。

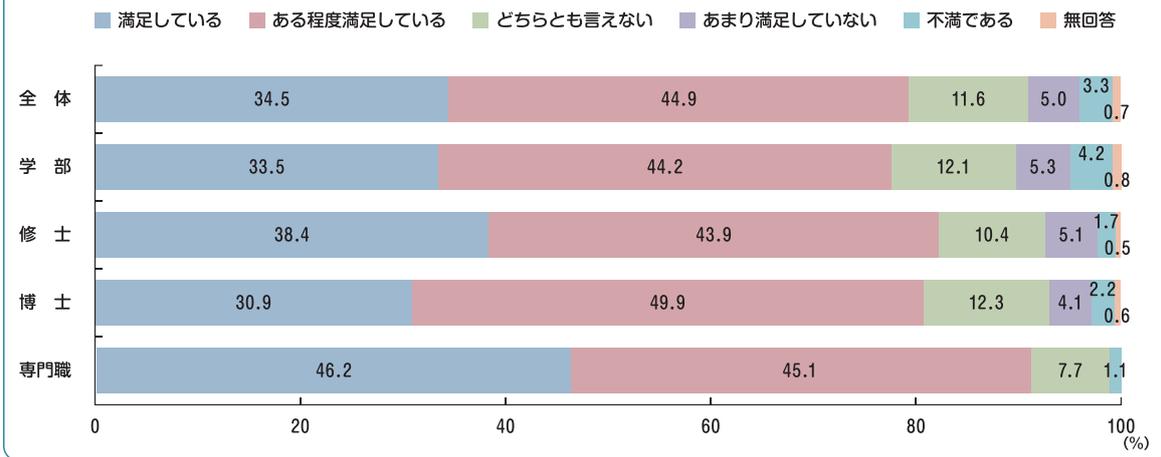
講義室・実験室などの教育環境に対する《満足・ある程度満足》は、全体で74.9%であり、課程別でもほぼ同様である。一方《不満》と表明する者は1~2%程度と低いので全体として満足度は高い。

平成25年度の調査から、大学からの情報発信媒体として何を希望するかを尋ねている。結果は課程別にやや異なり、学部で71.7%、専門職で60.4%が《クラシス》を希望しているが、修士では59.8%、博士では66.5%が《個人メールアドレスへの配信》を希望している。

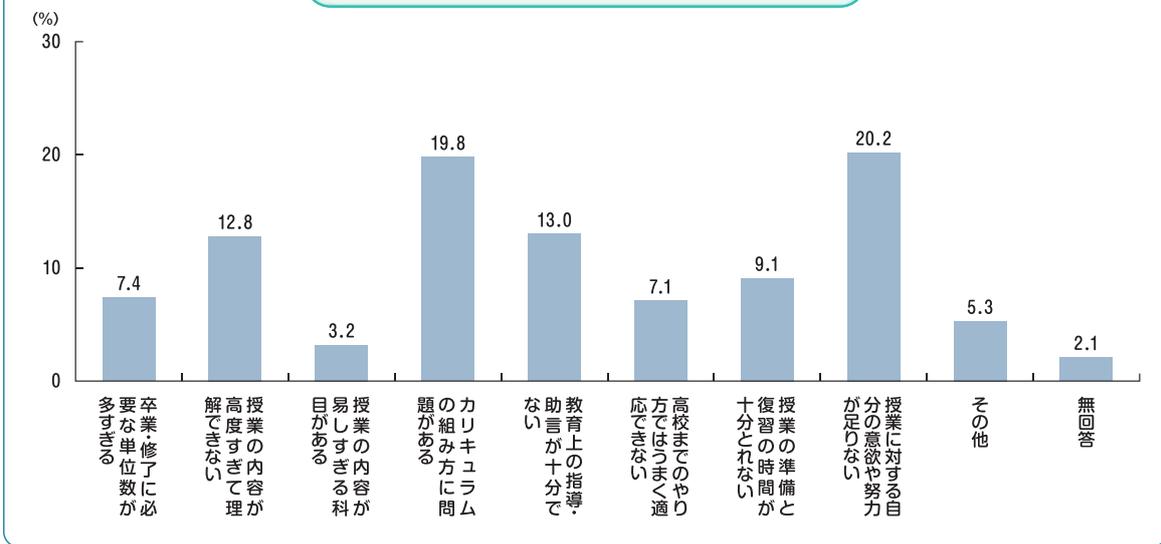
海外留学の希望・関心について、全体としては《希望・関心あり》が40.1%であり、課程別では博士と専門職の《希望・関心あり》がそれぞれ54.0%、51.6%と高い。《希望・関心なし》の理由については、いずれの課程でも《語学力の不安》が最も高く、次いで、《金銭的な不安》、《興味がない》等が高い。



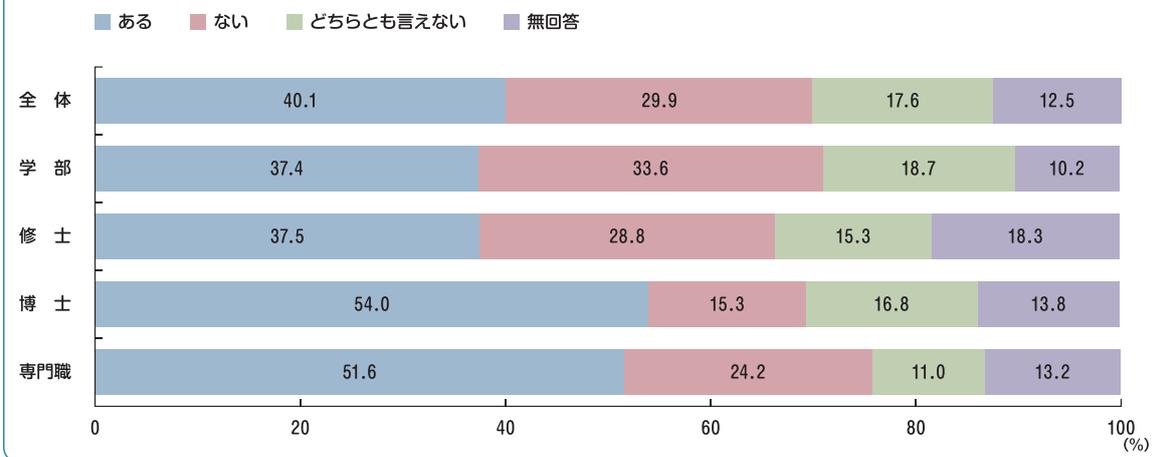
在籍学部・学科、大学院専攻等に対する満足度



現行カリキュラムへの改善要望等(学部のみ)



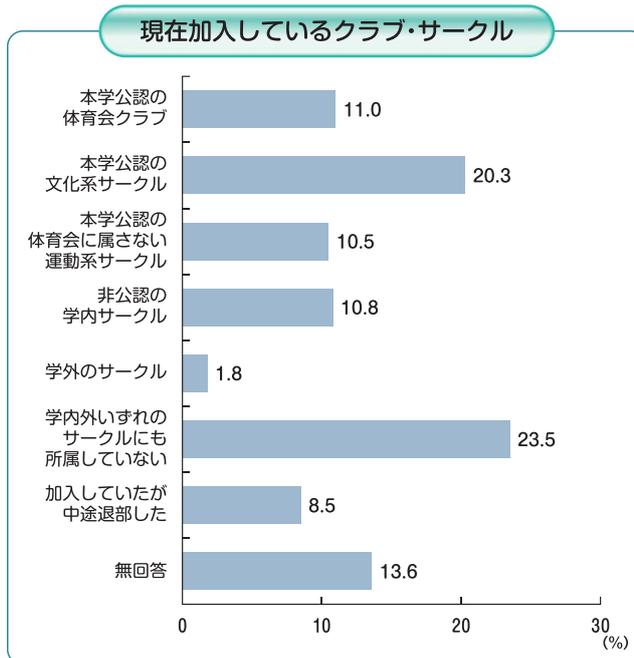
海外留学への希望・関心の有無



D. 課外活動（サークル・ボランティア活動）

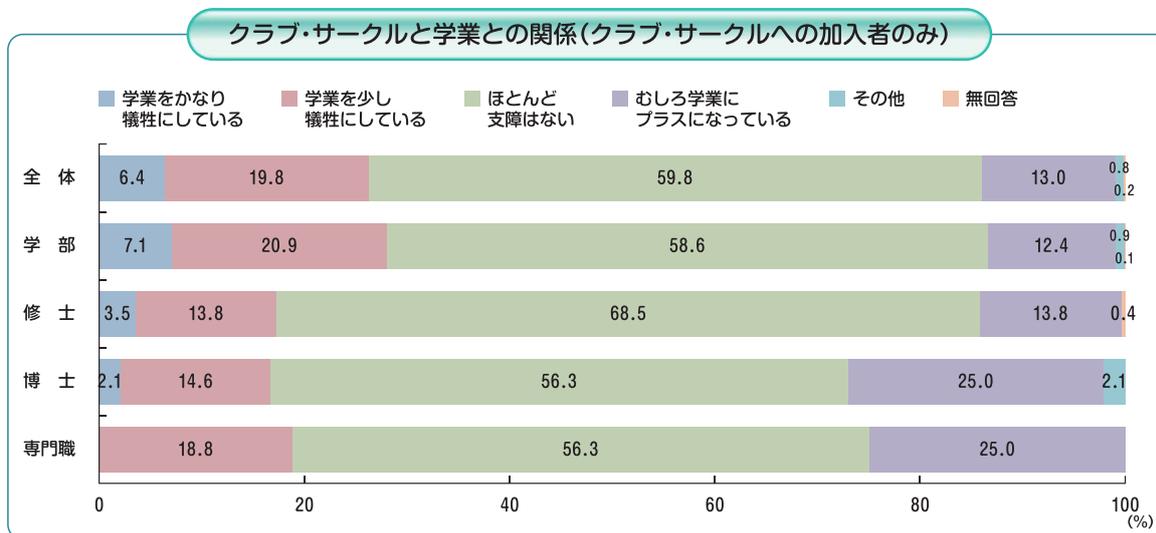
◆ 学内サークルに所属する学部生は71.7% ◆

何らかのクラブ、サークルに加入している学生（全体）は54.4%である。内訳は41.8%が本学公認のサークル、12.6%が非公認の学内サークルあるいは学外サークルであり、学内のサークルにほぼ満足していると考えられる。学部生に限れば、71.7%が学内のサークルに所属し、学外サークルに所属するものは0.9%しかない。年齢の上昇とともに外部へ出ていくことがわかる。サークルに所属していない院生は、修士で37.0%、博士では63.5%。二年前の数値と比べてみる時、サークル

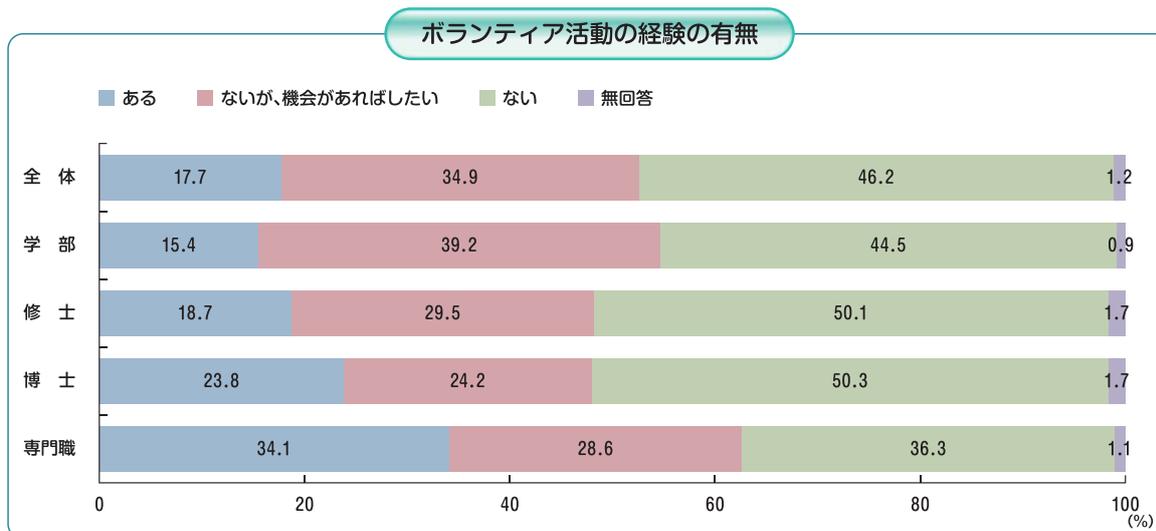


に所属する大学院生が増えている（修士:19.8%増、博士:17.6%増）。クラブ・サークルへの参加理由は、《活動内容が好きだから》が55.4%で最も多く、《友人を得るため》が14.5%、《団体生活に興味があるから》が3.3%と続くが、2つの回答を選択させる場合、最初の二つが圧倒的に多い。《面白くて、友達ができる》というのが最大公約数の理由と考えられる。この傾向は、学部、大学院でほとんど変わらない。サークルに加入していない理由は、《学業の妨げになる》と《時間がない》が、学部、大学院とも多い。

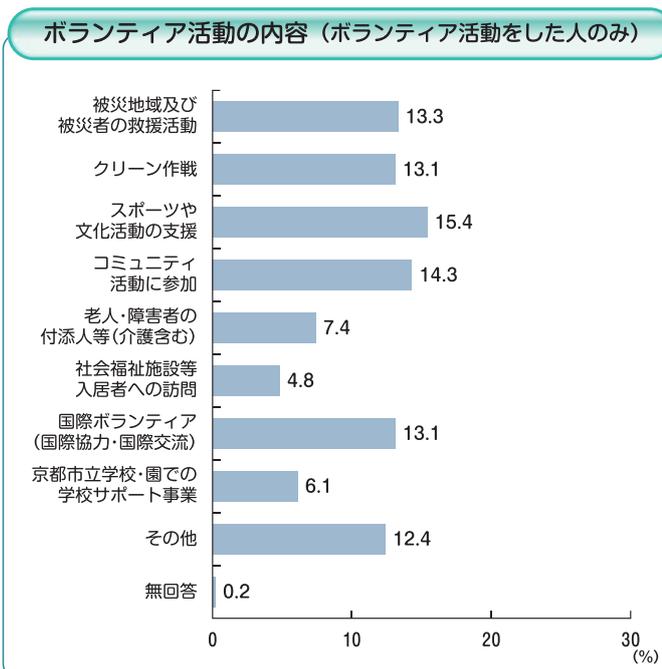
クラブ・サークルでの1週間あたりの活動時間は多様である。学部においては2時間未満（28.6%）、2-5時間（27.3%）が多いが、10時間以上もかなりの数にのぼる（20.5%）。修士以上では、半分以上（55.5%）は2時間未満である。クラブ・サークルと学業との関係を見ると、学部の約3割は学業を犠牲にしていると感じている。なお、課外活動施設・設備に対する満足度は、全体で、5段階評価で3.43であるが、不満が多いわけではない（最多の学部においても約17.0%）。



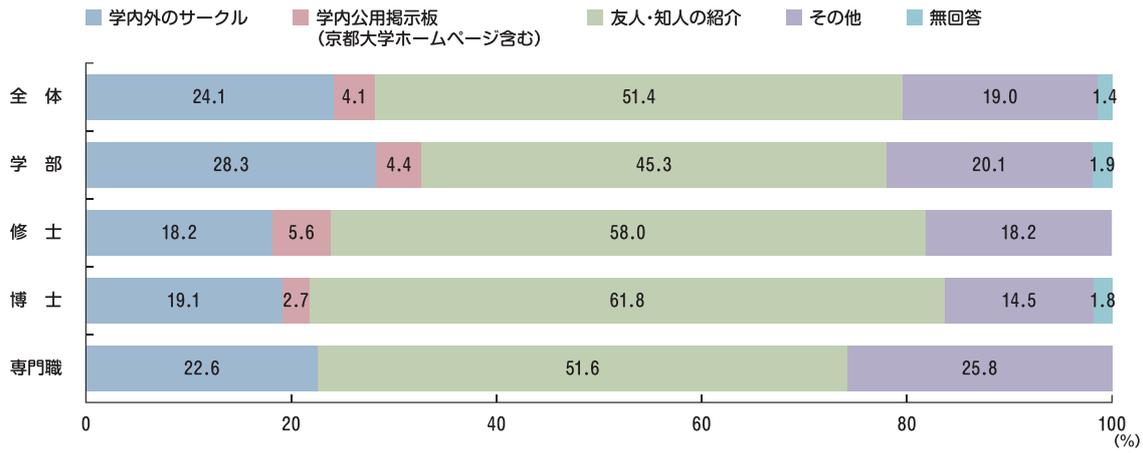
ボランティア活動の経験のある人は、学部で15.4%、修士で18.7%、博士で23.8%である。2年前の調査ではそれぞれ18.9%、21.9%、27.8%、4年前では19.9%、22.8%、29.9%であり、減少が認められる。



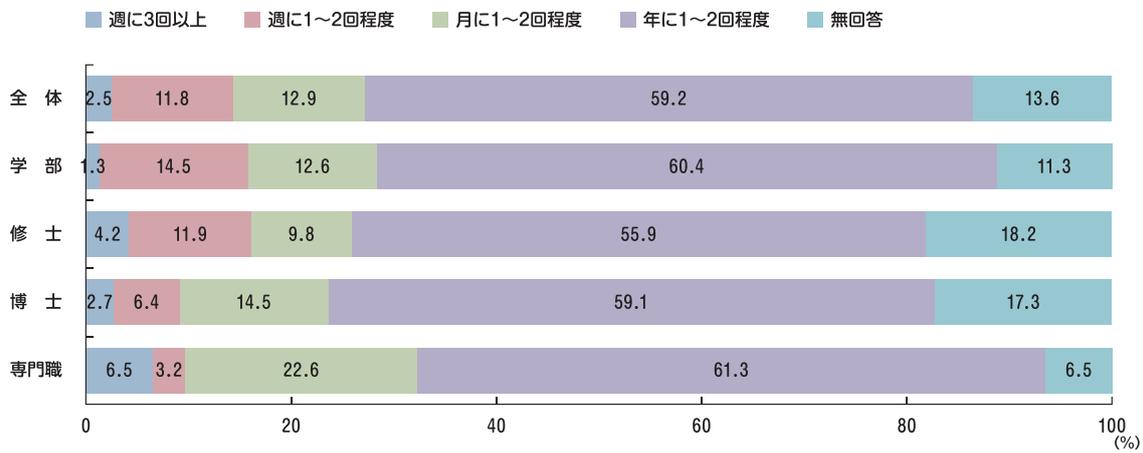
ボランティア活動の経験は学部では15.4%であるが博士では23.8%、専門職では34.1%と年齢が上がるに伴って増えている。また、機会があればやってもいいという学生を含めれば6割近くになる。ボランティア情報の入手経路は、《友人・知人の紹介》がすべての学生において約50%を占めるが、《学内外のサークル》からは学部は28.3%とかなり多い。ボランティア活動の内容は《スポーツや文化活動の支援》(15.4%)、《コミュニティ活動に参加》(14.3%)、《被災地域及び被災者の救援活動》(13.3%)、《国際ボランティア(国際協力・国際交流)》(13.1%)と多様である。頻度は《年に数回》というものが59.2%であった。また、ボランティア活動を経験した学生の49.4%が、《人生(社会)経験が得られ有意義だった》、15.2%が《自分の勉強に役立った》と感じている。



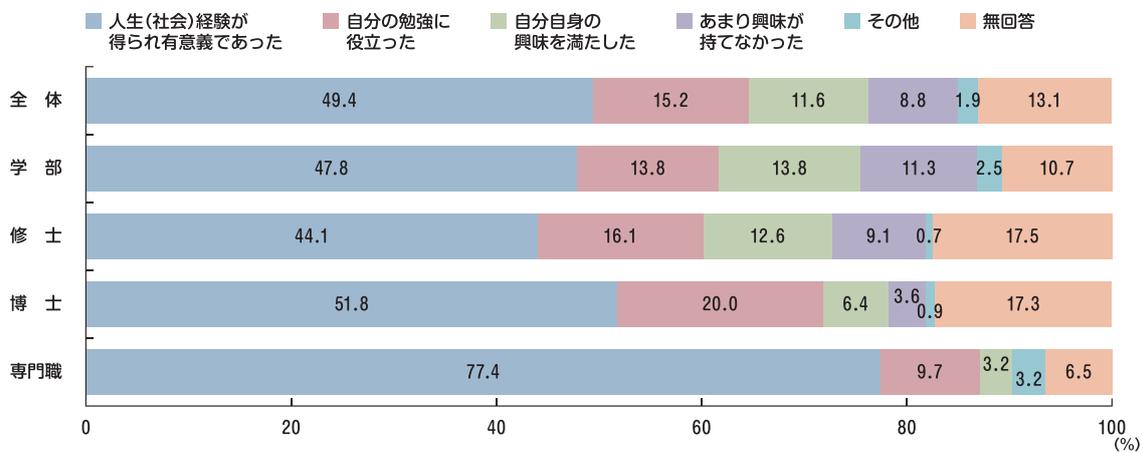
ボランティア情報の入手経路



ボランティア活動への従事回数



ボランティア活動を経験しての感想(ボランティア活動をした人のみ)

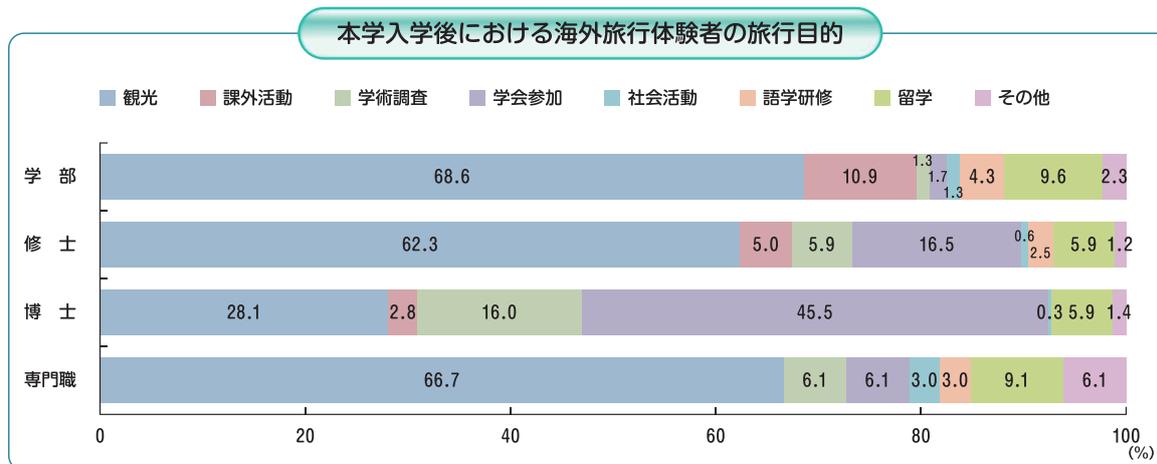


E. 旅行について

◆ 学部・修士・専門職は観光旅行が、博士は学会参加が主な目的 ◆

平成27年度前期に一泊以上の国内旅行をした回数は、1回が18.1%、2回が18.1%、3回が15.5%、4回が4.4%、5回以上が14.2%で、学部、修士、博士で大きな差は見られなかった。一方、一泊以上の国内旅行をしなかった学生は18.3%であった。

入学後の海外旅行経験者は学生全体で40.2%であった。海外旅行の目的は、学部では《観光》が68.6%と最多で、《課外活動》と《留学》がそれぞれ10%程度で続く。修士でも《観光》が62.3%と最多であるが、《観光》、《課外活動》、《留学》がそれぞれ5%程度減少する代わりに、《学会参加》が16.5%に、《学術調査》が5.9%に増加しており、研究に関連した海外渡航が増加する。この傾向は博士に顕著で、《学会参加》が45.5%と半数近くに増え、《観光》の28.1%を大幅に上回るとともに、《学術調査》も16.0%に増えている。この結果から、博士の海外渡航は主に研究に関連するものであることがわかる。専門職の旅行目的は、学部の傾向に近く、《観光》が66.7%と最多で、それに《留学》が9.1%で続く。海外渡航の目的という観点からは、修士や博士が大学院進学後に研究にシフトしていくのに対して、専門職は学部の延長に近いことがうかがえる。

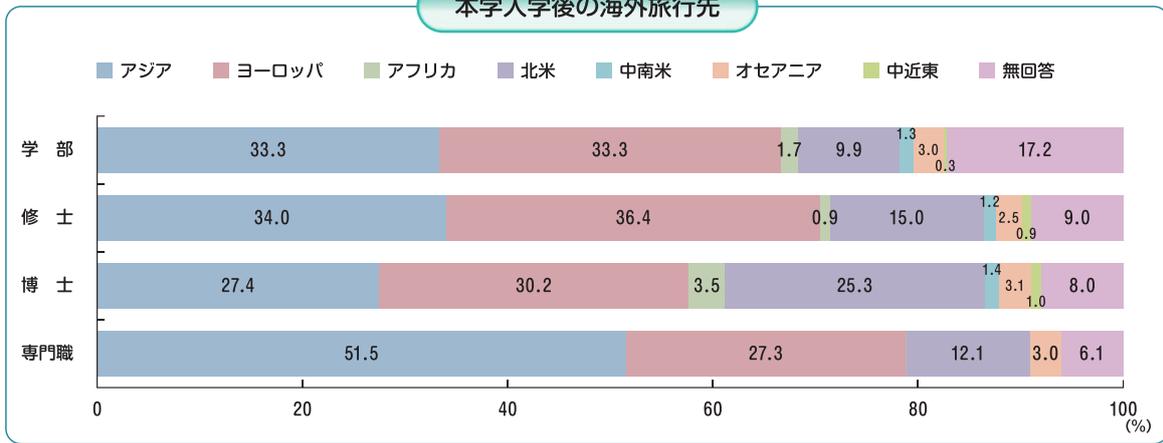


◆ 大学院進学後の渡航先は北米にシフト、専門職はアジア ◆

海外旅行先は、学生全体で見ると、《アジア》32.6%、《ヨーロッパ》33.2%、《アフリカ》1.9%、《北米》14.8%、《オセアニア》9.2%、《中近東》2.2%であり、これまでの調査と同様、《アジア》と《ヨーロッパ》が多い傾向にある。なお、大学院進学後には研究関連の海外渡航(学会参加や学術調査)が多くなることを反映して、渡航先では《北米》が増加する。博士では、《アジア》が27.4%、《北米》が25.3%であり、その差はほとんどない。



本学入学後の海外旅行先



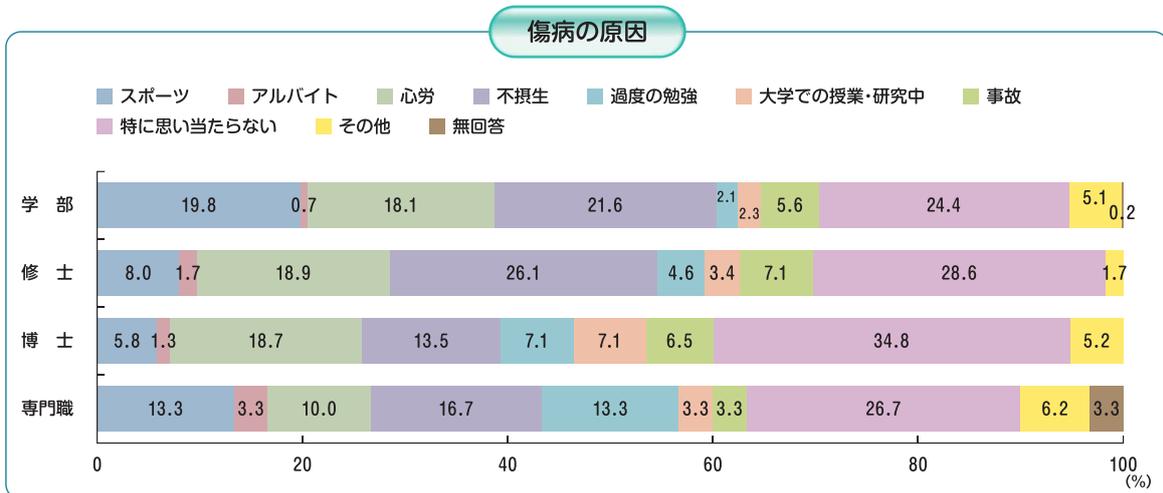
F. 健康・悩み等

◆ 約4割が傷病を経験。主な原因は不摂生・心労・スポーツ ◆

平成27年度前期に傷病をした京大生は、《病気》が26.4%、《けが》が7.4%、《両方した》が4.3%、《いずれもしなかった》が50.4%であり、これまでの調査結果と比べて《いずれもしなかった》割合が減少した。傷病の原因は、学生全体では《不摂生》が21.3%、《心労》が18.1%、《スポーツ》が15.9%となっている。《不摂生》は修士が26.1%で最大であり、学部の21.6%、専門職の16.7%、博士の13.5%と続く。大学院進学後に学部よりも講義や課外活動が少なくなり、そこで生まれた自由な時間をうまく管理できていないのかもしれない。《心労》は学部、修士、博士でほとんど変わらず18%台であるが、専門職のみ10.0%と低い。《スポーツ》は学部が19.8%で突出しており、修士や博士では1割未満、専門職でも13.3%にとどまる。なお、専門職においては、《過度の勉強》が13.3%でスポーツと並ぶ主要な原因の一つとなっており、この割合は博士の7.1%と比較しても顕著に高い。

治療日数は、1週間未満の者が過半数を占めるが、1カ月を超える者も17.8%いる。治療方法は、学内・学外医療機関への通院がそれぞれ3.7%・43.8%、入院が5.0%、市販薬の服用が17.5%であり、自宅療養のみが27.5%を占めた。健康維持のために行っていることとしては、《特に何

傷病の原因



もしていない》と回答した学生が32.3%で最も多く、《スポーツをしている》の21.6%、《食事に気を付けている》の20.5%、《規則正しい生活を心掛けている》の12.5%を大きく上回った。

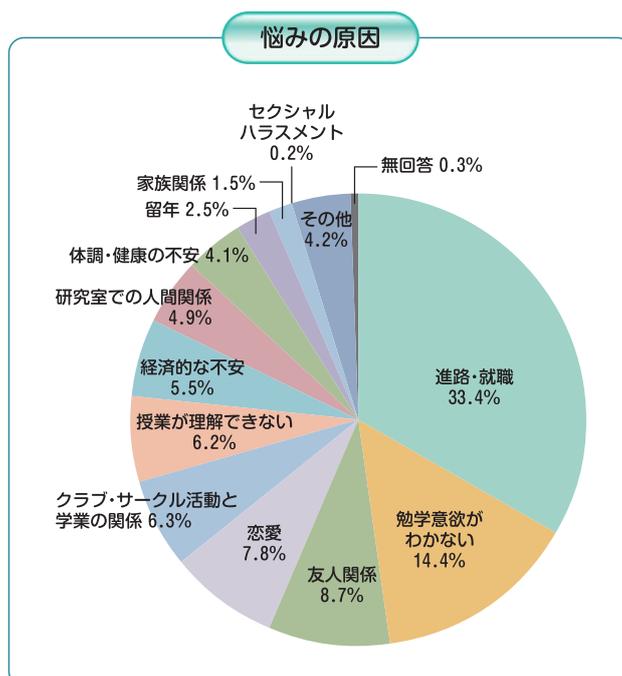
◆ 喫煙していない学生は95%以上 ◆

現在喫煙している学生は4.4%と少数であり、ほとんどの学生は喫煙していない。喫煙する学生の96.2%が学内における指定喫煙場所以外での「禁煙」について知っているという回答したが、学部が100%、修士と博士がそれぞれ93.3%と95.8%知っているのに対して、専門職は85.7%しか知っておらず、組織的な対応が求められる。

学生教育研究災害傷害保険へ加入している学生は全体で69.4%に上る一方、わからないと答えた学生も21.2%いた。学部・修士・博士では加入している学生が70%前後であるのに対して、専門職では54.9%にとどまっている。学生教育研究災害傷害保険以外では、《学生総合共済》51.4%、《学研災付帯賠償責任保険》27.9%、《生命保険》25.0%等へ加入している。

◆ 悩みの原因は、学部・大学院生ともに《進路・就職》がトップ ◆

学生の64.7%が入学以降に悩みを感じている一方、23.1%の学生は悩みがないと答えている。悩みを持つ学生が一番悩んでいるのは、《進路・就職》についてが33.4%で最も多く、《勉強意欲がわからない》の14.4%、《友人関係》の8.7%、《恋愛》の7.8%を上回っている。悩みを持つ学生のうち、一番の悩みが《進路・就職》である学生は、学部では27.8%であるが、修士・博士・専門職でそれぞれ47.0%、41.0%、52.0%と半数近くになる。《勉強意欲がわからない》学生は、学部で16.7%にのぼるが、修士で12.8%、博士で6.6%、専門職で2.0%と、大学院での割合が低くなっている。また、《授業が理解できない》ことに最も悩んでいる学生は、学部で7.2%、修士で4.7%、博士で1.7%であるのに対して、専門職では12.0%と高い割合になっている。



◆ 博士は《研究室での人間関係》と《経済的な不安》にも悩んでいる ◆

悩みを持つ学生のうち、修士の11.1%、博士の14.7%、専門職の8.0%が《研究室での人間関係》が一番の悩みであると回答しており、大学院に進学して研究室で過ごす時間が増えると、そこでの人間関係に悩む学生が増える様子がうかがえる。さらに、博士の15.0%が《経済的な不安》が一番の悩みであると回答しており、《進路・就職》に次ぐ悩みになっている。

悩みの相談相手としては、学生全体では、《学内の友人・知人》が37.8%で最も多く、次いで《家族》の25.2%、《学外の友人・知人》の12.0%となっている。学部と修士では《学内の友人・知人》が最も多いが、博士と専門職では《家族》が30%を超えて最も多くなる。大学に残っている同期が少なくなることがその原因と思われる。なお、《誰もいない》と回答した学生も多く、学部で22.0%、修士で16.5%、博士で16.8%、専門職で8.0%にのぼる。

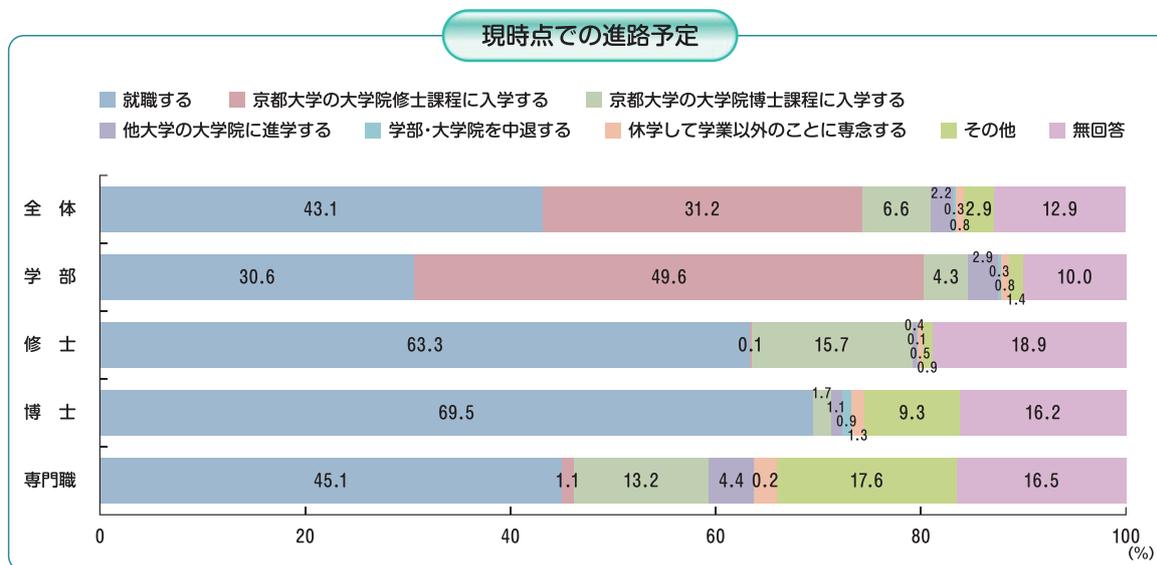
G. 進路（進学・就職）

◆ 学部の進学希望者は56.8%、就職希望者は30.6% ◆

学部の56.8%が大学院への進学を、30.6%が就職を予定している。修士では、15.7%が博士への進学を、63.3%が就職を希望している。

希望の職業について、学部と比べて修士では、医師や弁護士等の《専門職》が14.3%から3.9%に減り、《技術職》が10.7%から25.2%に増える。博士では、《大学・官公庁の教育・研究職》が44.9%と半数近くまで増加する。一方、専門職では、《専門職》が26.4%と最も多く、《総合職》の13.2%、《大学・官公庁の教育・研究職》の11.0%が続く。

その職業に就きたい一番の理由は、学生全体では《自分の特技・能力や専門知識が活かせる》が27.9%で最も多く、《人を助け社会に貢献できる》が19.7%、《安定した生活が保障される》が9.4%、《自分自身の成長が期待できる》が7.7%、《十分な収入が期待できる》が7.5%、《独



創性や創造性を発揮できる》が6.5%の順になっている。学部と修士の傾向は学生全体と同様であるが、博士では《自分の特技・能力や専門知識が活かせる》が39.5%で突出し、次の《人を助け社会に貢献できる》の14.0%を引き離している。一方、専門職では《人を助け社会に貢献できる》が35.2%で最も多く、《自分の特技・能力や専門知識が活かせる》の16.5%を大きく上回っている。学部と比べて、大学院は、安定した生活や十分な収入よりも、自分の専門性を活かすことや社会に貢献することを意識している。

理想の仕事・職場を選ぶ場合に重視することとしては、《やりがいがある》が31.4%で最も多く、《能力が発揮できる》の11.4%や《休暇を取りやすい》の9.0%に大差をつけている。特に専門職では《やりがいがある》の割合が45.1%と顕著に高い。就職する希望の地域は、《地域を問わない》が35.1%で最も多く、《京阪神地区》が29.7%、《首都圏》が12.0%であった。《外国》を希望する学生も1.9%いた。

就職、キャリアデザイン、インターンシップ等の情報の主な入手経路としては、インターネットが46.8%で最も多く、先輩・友人の20.2%、キャリアサポートセンターの6.5%、会社等説明会の3.9%などを大きく上回った。

将来についての見通しを持っている学生は全体の65.9%で、その割合は、学部で60.6%、修士で71.0%、博士で77.5%と進学するにつれて増加している。さらに、専門職では91.2%に達しており、ほとんどの学生が将来についての見通しを持っている。また、将来についての見通しを持っている学生のうち、その実現に向けてすべきことを実行している学生は45.8%にとどまっており、何をすべきかわからないという学生も22.0%にのぼる。何をすべきかわからない学生の割合は、進学するにつれて下がり、学部では28.7%だが、修士では18.1%、専門職では9.6%、博士では6.7%になる。

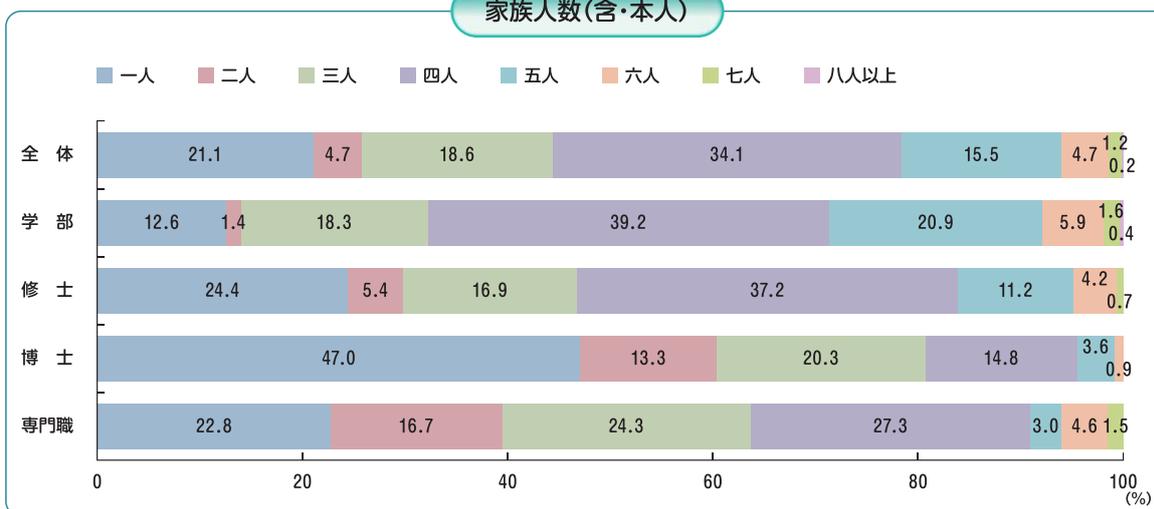
H. 家庭状況

◆ 4人家族が3割、進学とともに一人暮らしが増加 ◆

家庭の人数（本人を含む）は、全体では、無回答を除くと《4人》が34.1%と最も多く、次いで《1人》が21.1%、《3人》が18.6%となっている。前回調査では《4人》《5人》《3人》の順であり、前回と比較すると《5人》の割合が大きく減り、《1人》の割合が増加していることがわかる。《1人》の割合について個別にみると、学部、修士、博士と進むにつれ12.6%、24.4%、47.1%と倍増しており、一方、修士の主な家計支持者が本人ではないことを考えると、前回調査では実家の家庭状況について答えていたのに対し、今回の調査では現在ともに生活している家族の数を答えていると思われる。すなわち、進学するに従い、一人暮らしをする割合が増加していると考えられる。また、子供がいる割合は、学部で1.8%、修士で3.8%、博士で20.7%、専門職で38.5%である。前回調査と比べると、博士、専門職の数値が著しく増加している。



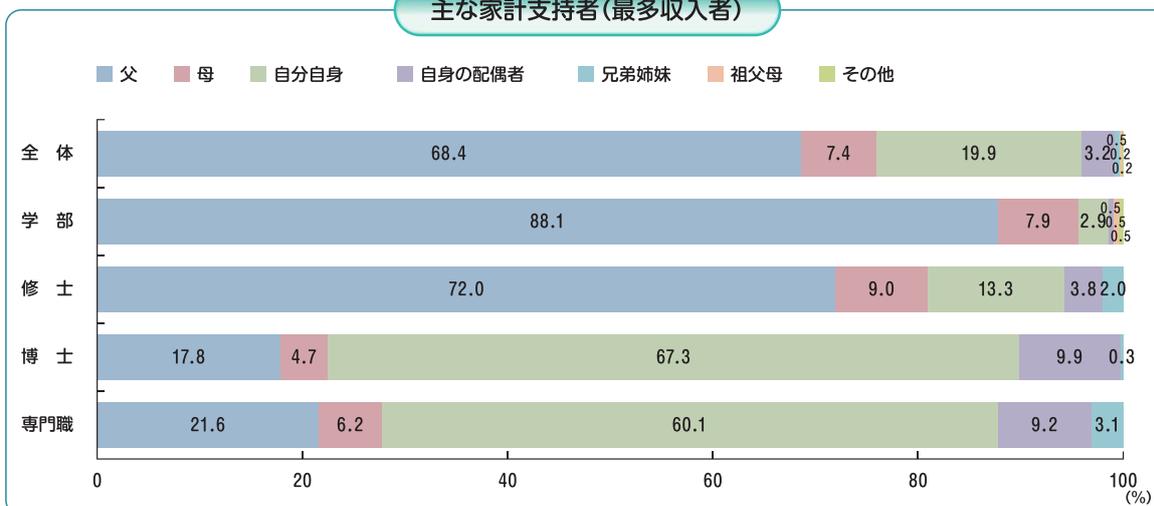
家族人数(含・本人)



◆ 学部・修士と博士では家庭の収入分布に大きな差異 ◆

主な家計支持者が両親のいずれかである割合は、学部95.9%、修士80.9%に対して、博士は22.5%、専門職は27.7%にとどまる。前回調査と比べると、院生における割合が10%以上低下している。学生自身もしくは配偶者が主な家計支持者である割合は、学部3.3%、修士17.1%、博士77.2%、専門職69.3%である。

主な家計支持者(最多収入者)

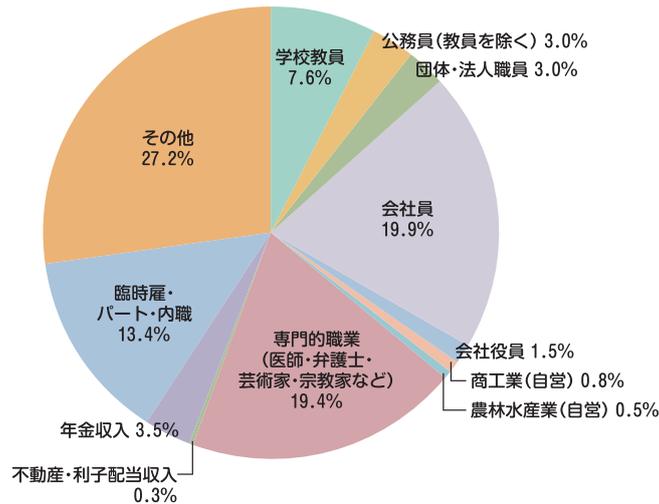


主な家計支持者の職業は、《会社員》が41.9%と最も多く、《学校教員》9.6%、《専門的職業》9.8%、《公務員》8.9%であり、前回や前々回の調査と似通った分布となっている。なお、博士では、主たる家計支持者が《会社員》である割合は19.9%にとどまり、《専門的職業》が19.4%とほぼ同じ割合となった。博士には独立生計を営むものが多く、自らを《専門的職業》と分類しているからである。

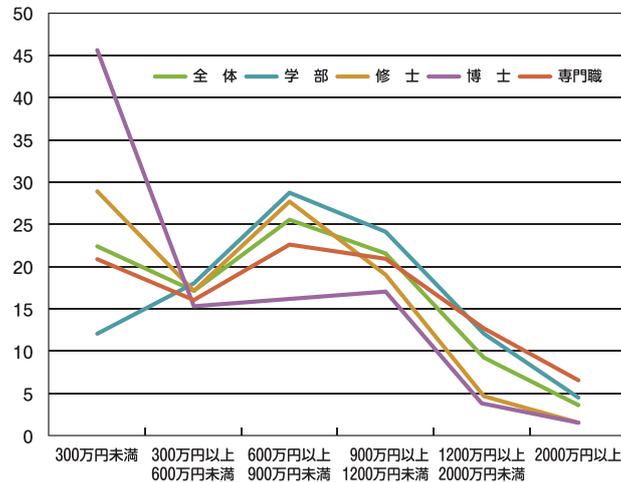
家庭の収入分布は、(300万円未満22.5%)、(300～600万円未満17.2%)、(600～900万円未満25.7%)、(900～1200万円未満21.6%)、(1200～2000万円未満9.3%)、(2000万円以上3.7%)となっている。博士の場合には、独立生計を営むものが多いため、300万円未満が45.7%ともっとも多い。専門職は前回同様、2000万円未満のあらゆる所得層に万遍なく分布していた。



主な家計支持者の職業・収入源



家庭の年収



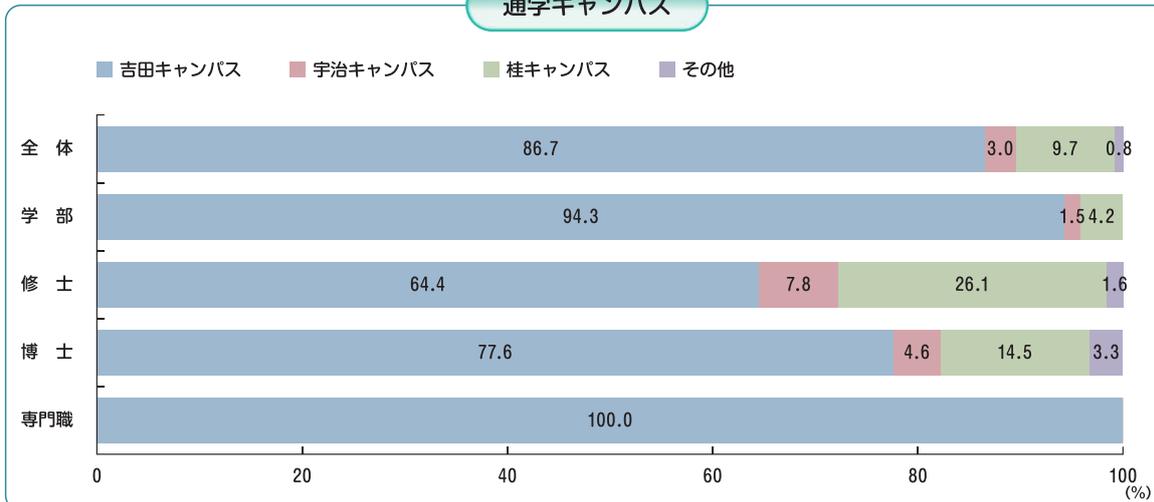
1. 住居と通学

◆ 自宅外生は7割 ◆

自宅通学している学生の割合は、学部で35.5%、修士で33.0%、博士で70.4%、専門職で67.5%である。前回と比べると、専門職の増加が顕著である。博士・専門職で自宅生が多いのは独立生計を営む割合が増えるからである。

通学キャンパスはたいていが吉田キャンパスであるが、修士と博士で、桂キャンパス（それぞれ26.1%、14.5%）と宇治キャンパス（それぞれ7.8%、4.6%）が多くなる。学生の多くはキャンパスの近くに居住している。キャンパスから《1km以内》が33.8%、《2km以内》が22.8%、《5km以内》が13.3%である。7割以上の学生が《5km以内》に居住している。近隣の《大阪府・滋賀県・奈良県》からの通学者は15.6%であり、その内訳は学部16.0%、修士12.5%、博士16.0%、専門職25.7%である。

通学キャンパス

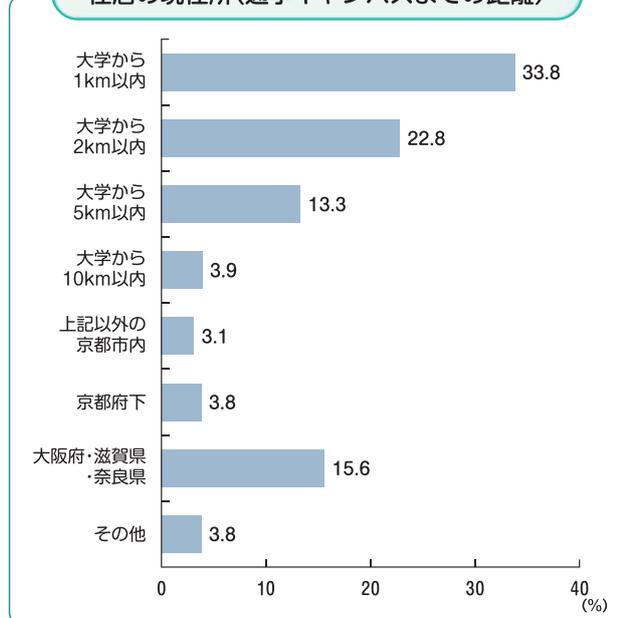


自宅外通学者の約9割は《アパート・マンション》に暮らしている。一方、《京都大学の学生寮》に入居している割合は、学部で4.5%、修士で2.4%、博士で3.4%、専門職で4.0%である。自宅外通学者のうち一人暮らしは、学部、大学院に関わらず9割を超える。

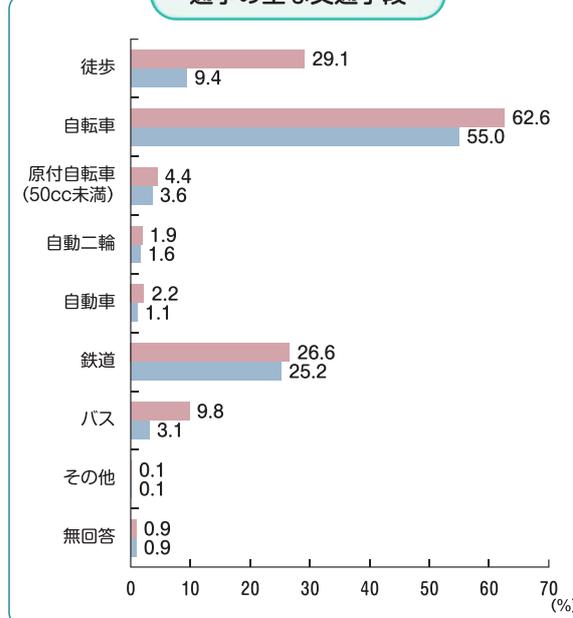
通学時の主たる交通手段は、《自転車》がもっとも多く、学部68.7%、修士52.8%、博士52.1%、専門職48.4%である。次いで多いのは、《鉄道》もしくは《徒歩》となっている。

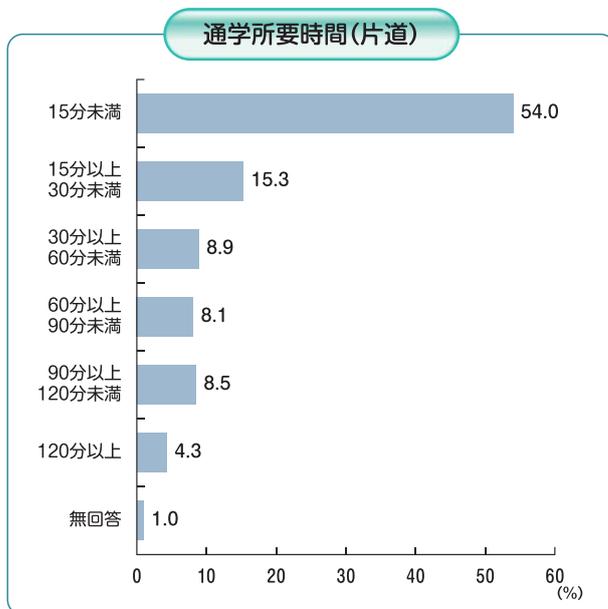
通学所要時間は《15分未満》が54.0%と多い。《15分～30分未満》が15.3%なので、7割が30分圏内に居住していることになる。また、修士や博士では《15分～30分未満》が多いのは、桂や宇治のキャンパスへの通学者が多いことが一因と考えられる。

住居の現住所(通学キャンパスまでの距離)



通学の主な交通手段





J. 生活費の状況

◆ 収入の部 ◆

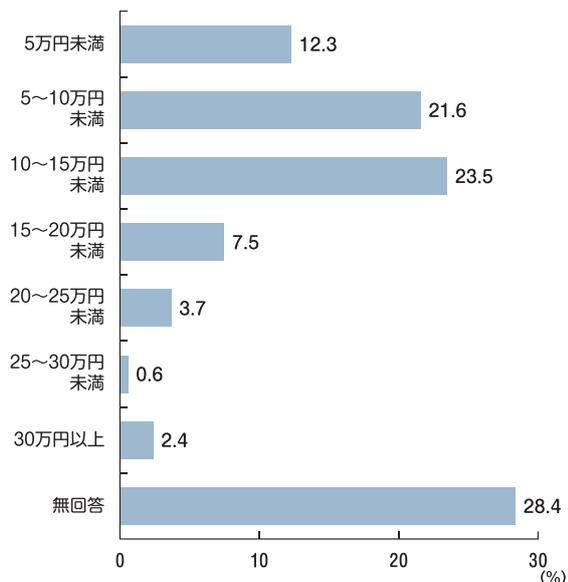
京大生の平均月収は112,230円である。学部の平均が89,190円であるのに対して、博士の平均は218,900円であり、大きな違いがある。また博士については、収入の個人差が他の学生群に比べてより大きいことも特徴的であろう。収入の内訳については、学部の月収に《家族から》が占める平均的な割合は60.2%、修士では47.1%、博士では13.6%、専門職では29.2%である。《奨学金・研究奨励金》は、同じ順序でそれぞれ、16.2%、32.2%、37.2%、12.9%であり、《アルバイト》については、23.1%、18.9%、37.8%、3.6%である。博士以外は家族への依存度が高いが、博士については《家族からの仕送りなし（除・授業料等の大学納付金分）》が57.5%（学部18.7%、修士20.3%、専門職49.5%）を占めており、平均的に見れば、自立性が高いと思われる。また、「家族からの仕送りによる学生生活の実行性」の調査項目で、《家族からの仕送りのみでは生活が困難》および《家族からの仕送りのみでは生活に不自由》と回答した学生の割合は、合計で21.5%であった。

自身の1ヶ月平均収入 《費目別平均金額と構成比》

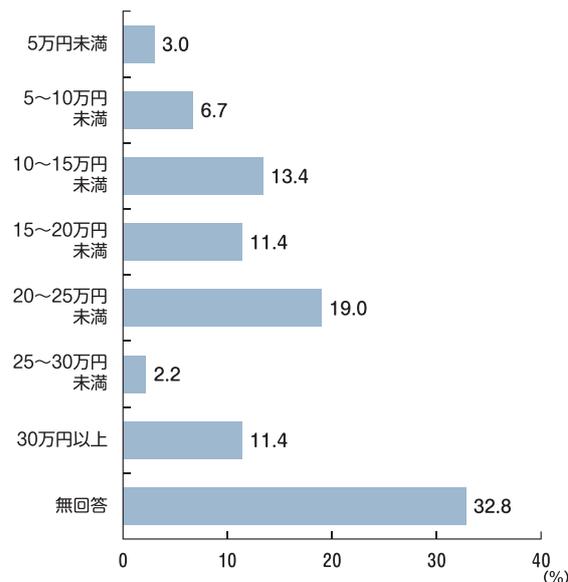
| | | ① 家族から (除・授業料 等の大学 納付金分) | ② 奨学金 ・研究 奨励金 | ③ アルバイト | ④ その他 | ⑤ 収入合計 |
|-----|---------|--------------------------------------|------------------------|------------|----------|-----------|
| 全 体 | 平均値(千円) | 50.31 | 27.22 | 28.36 | 6.34 | 112.23 |
| | 構成比(%) | 44.8 | 24.3 | 25.3 | 5.6 | 100.0 |
| 学 部 | 平均値(千円) | 53.66 | 14.48 | 20.61 | 0.45 | 89.19 |
| | 構成比(%) | 60.2 | 16.2 | 23.1 | 0.5 | 100.0 |
| 修 士 | 平均値(千円) | 51.19 | 34.97 | 20.60 | 2.00 | 108.76 |
| | 構成比(%) | 47.1 | 32.2 | 18.9 | 1.8 | 100.0 |
| 博 士 | 平均値(千円) | 29.74 | 81.40 | 82.74 | 25.02 | 218.90 |
| | 構成比(%) | 13.6 | 37.2 | 37.8 | 11.4 | 100.0 |
| 専門職 | 平均値(千円) | 63.32 | 27.91 | 7.77 | 117.87 | 216.87 |
| | 構成比(%) | 29.2 | 12.9 | 3.6 | 54.4 | 100.0 |



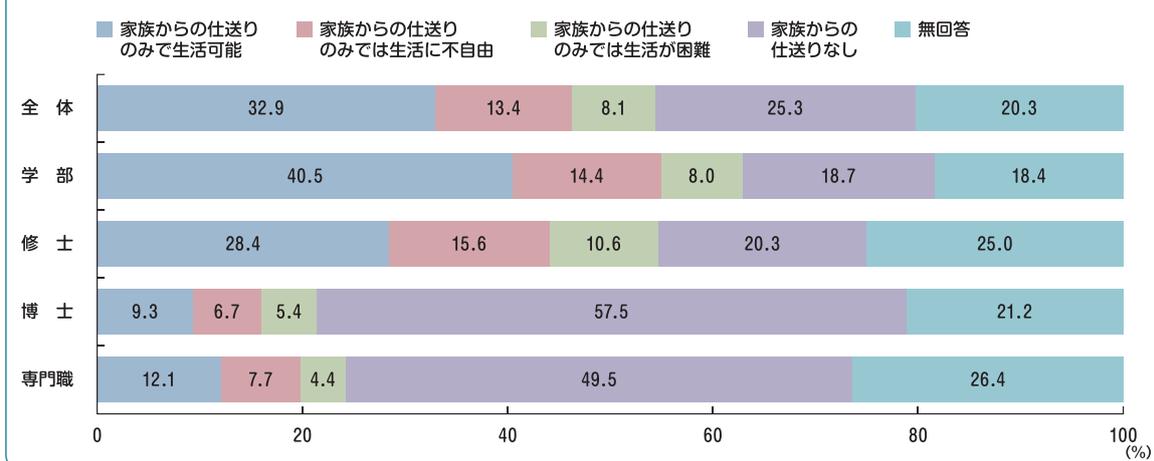
収入合計<自身の1ヶ月平均収入>【全体】



収入合計<自身の1ヶ月平均収入>【博士】



家族からの仕送りによる学生生活の実行性



◆ 支出の部 ◆

毎日の生活に必要な基礎支出比《食費、住居費》が全体に占める割合は、56.9%であり、前回調査とほぼ同じである。また学部、修士、専門職の学生については、支出の構成比率は非常に類似しているが、博士については基礎支出比が40.2%とやや低く、《医療費》《その他》《剰余金・預貯金》の割合が多くなっているのが特徴的だろう。

支出のうち、最も増やしたい費目としては、学部、修士、専門職の学生は、いずれも第一に《勉学費》、第二に《衣服・嗜好品・日常雑貨》をあげたが、博士は、第一に《剰余金・預貯金》、第二に《勉学費》をあげており、この点にも違いがみられる。他方、最も減らしたい支出費目としては、四者すべてが《食費（含・外食費）》をあげた。



自身の1ヶ月平均支出 《費目別平均金額と構成比》

| | | ① 食費 (含・自宅 通学者の 外食費等) | ② 住居費 (家賃・ 光熱水料 /自宅外 通学者) | ③ 衣服・ 嗜好品・ 日用雑貨 | ④ 勉学費 (教科書・ 参考書・ 文房具・ 交通費等) | ⑤ 課外 活動・ 教養 娯楽費 | ⑥ 情報・ 通信費 | ⑦ 医療費 (含・健康 保険の 掛金) | ⑧ その他 | ⑨ 剰余金・ 預貯金 | ⑩ 支出合計 |
|-----|---------|-----------------------------------|--|--------------------------|--|-----------------------------|-----------------|---------------------------------|----------|------------------|-----------|
| 全 体 | 平均値(千円) | 25.52 | 38.36 | 11.03 | 7.68 | 8.38 | 4.51 | 2.02 | 2.48 | 12.19 | 112.23 |
| | 構成比(%) | 22.7 | 34.2 | 9.8 | 6.8 | 7.5 | 4.0 | 1.8 | 2.2 | 10.9 | 100.0 |
| 学 部 | 平均値(千円) | 22.68 | 34.10 | 9.33 | 5.51 | 7.36 | 3.38 | 0.99 | 1.33 | 4.52 | 89.19 |
| | 構成比(%) | 25.4 | 38.2 | 10.5 | 6.2 | 8.3 | 3.8 | 1.1 | 1.5 | 5.1 | 100.0 |
| 修 士 | 平均値(千円) | 28.88 | 41.29 | 11.69 | 8.07 | 8.19 | 5.18 | 1.68 | 1.82 | 1.96 | 108.76 |
| | 構成比(%) | 26.6 | 38.0 | 10.7 | 7.4 | 7.5 | 4.8 | 1.5 | 1.7 | 1.8 | 100.0 |
| 博 士 | 平均値(千円) | 34.26 | 53.69 | 18.52 | 16.87 | 13.60 | 8.13 | 6.30 | 7.85 | 59.27 | 218.90 |
| | 構成比(%) | 15.6 | 24.5 | 8.5 | 7.7 | 6.2 | 3.7 | 2.9 | 3.6 | 27.1 | 100.0 |
| 専門職 | 平均値(千円) | 31.73 | 53.17 | 13.13 | 16.30 | 10.00 | 12.28 | 11.40 | 12.00 | 56.86 | 216.87 |
| | 構成比(%) | 14.6 | 24.5 | 6.1 | 7.5 | 4.6 | 5.7 | 5.3 | 5.5 | 26.2 | 100.0 |

K. アルバイト

《アルバイトをしなかった》という学生の割合は全体で28.2%であり、前回調査から約6.5%減少した。この変化は、学部、修士、博士、専門職のすべてに共通しており、代わりに《定期的に毎月した》という回答の割合が減少している。学生種別の違いに関しては、前回同様、専門職が特徴的であり、《アルバイトをしなかった》学生が57.1%を占めている。職種（1・2位）については、《学習塾講師》が27.7%、《飲食店》が21.9%、《教育研究補助(TA・RA)》が17.8%、《家庭教師》が10.5%の順となった。

学部では《学習塾講師》が31.8%、《飲食店》が26.4%、《家庭教師》が12.4%の順、修士では、《教育研究補助(TA・RA)》が39.8%、《学習塾講師》が23.2%、《飲食店》が14.8%の順となった。博士では、《教育研究補助(TA・RA)》が55.3%と大半を占める結果となった。大学院におけるTA・RA制度拡充の影響が数値として現れているが、さらなる制度的整備が必要と思われる。月平均労働時間については、学生全体の29.7%が40時間以上労働しており、生活のかなりの割合をアルバイトが占めていることがわかる。

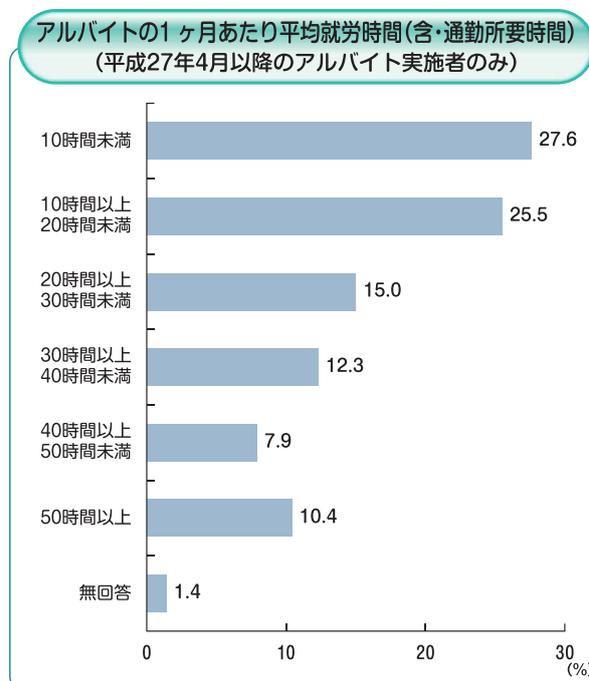
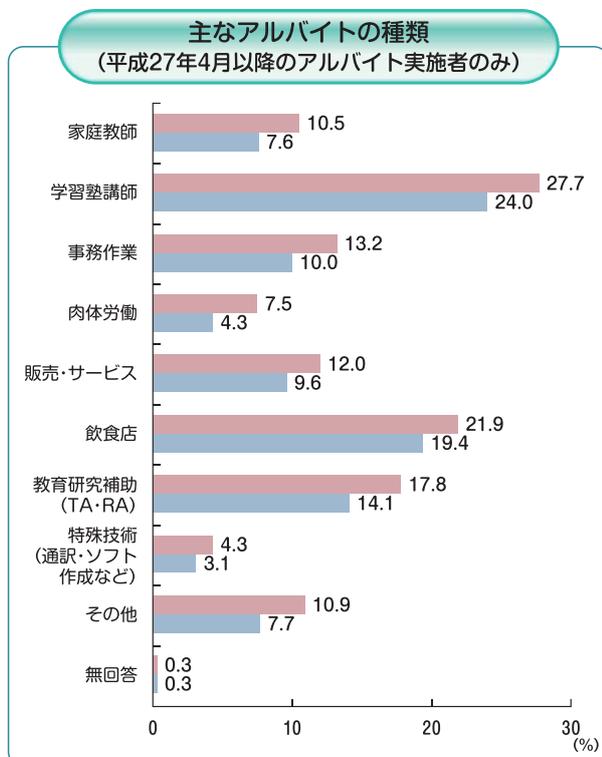
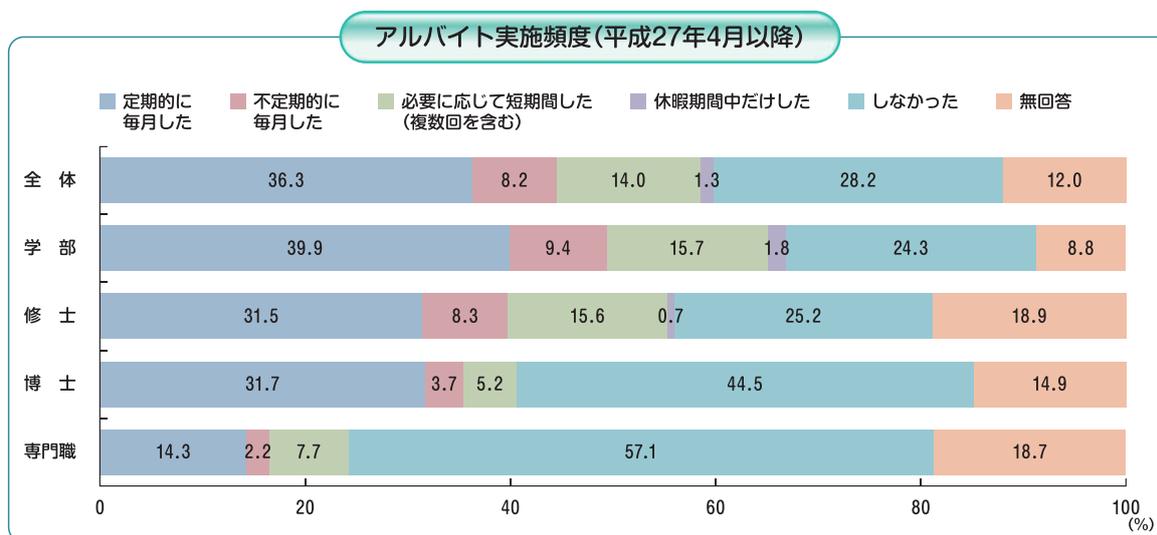
アルバイトの紹介先(1・2位)は、学部では《友人・知人》35.4%と《紹介誌・新聞広告・チラシ》23.6%が主となり、修士では、《友人・知人》33.0%、《教員》30.2%、《自分で開拓》17.3%の順となった。また、専門職では、《友人・知人》31.8%、《自分で開拓》22.7%、《紹介誌・新聞広告・チラシ》18.2%の順となった。一方、博士では、《教員》52.7%と《友人・知人》29.3%が主となり、教員が紹介する《教育研究補助(TA・RA)》の比率に対応した結果になっている。

アルバイト収入の用途(1・2位)については、学部では、《衣・食・住の費用》が41.6%、《教養・娯楽費》が34.4%、《預貯金》が20.4%であり、修士については《衣・食・住の費用》が61.6%、《教養・娯楽費》が30.2%、《勉学費》が17.6%であり、専門職では、《衣・食・住の費用》77.3%、《教養・娯楽費》22.7%、《勉学費》13.6%と続いているのに対し、博士については、《衣・食・住の費用》77.7%、《勉学費》35.6%、《預貯金》13.8%となっており、「生活費の状況」における支出内訳と同様、学部・修士と博士・専門職との差が目立つ結果となった。

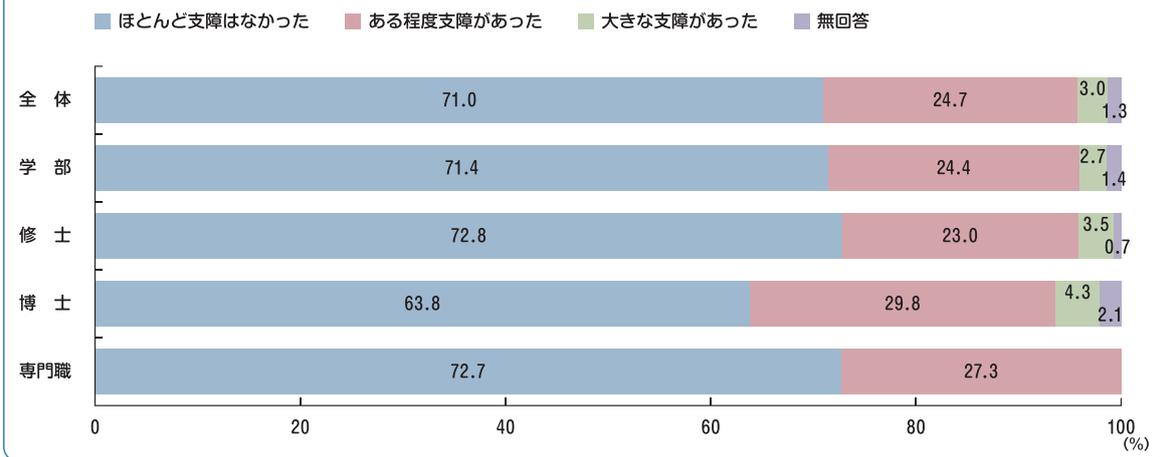
アルバイトと学業の関係について、学部、修士、博士、専門職の学生の6割以上が《ほとんど支障はなかった》との回答結果であった。

またアルバイトをしなかった理由について、全体の43.8%が《やりたかったが時間的余裕がなかった》ことをあげ、また35.5%が《経済的に不要》であるとの回答を選択した。

なおアルバイト経験の感想について、全体の60.6%が《人生（社会）経験が得られて有意義であった》としている。



アルバイトによる学業への影響(平成27年4月以降のアルバイト実施者のみ)



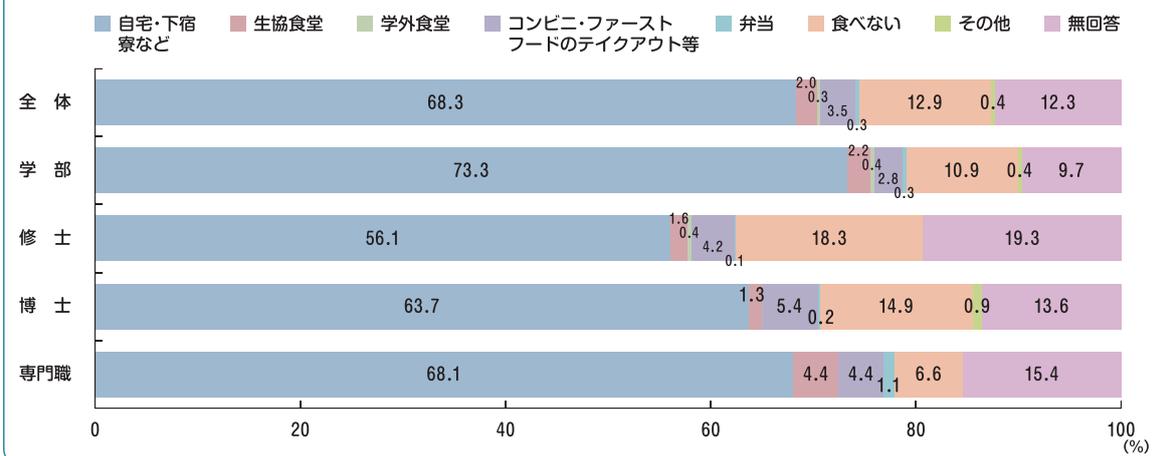
L. 食事

◆ 朝食と夕食は自宅、昼食は生協食堂 ◆

朝食は主として《自宅・下宿・寮など》で取っている学生が68.3%である。一方で、《朝食抜き》は12.9%であり、二年前の調査(16.2%)に比べて多少減ってはいるが、学部10.9%、修士18.3%、博士14.9%、専門職16.6%となっている。また昼食は、《生協食堂》が47.9%、《弁当》4.6%、《自宅・下宿・寮など》12.4%10.9%、《コンビニ・ファーストフードのテイクアウト》が4.6%となっている。夕食は、《自宅・下宿・寮など》が61.4%、《生協食堂》が13.7%、《学外食堂》が8.1%となっている。二年前の調査では夕食に生協食堂を利用するものが院生では学部の2～3倍となっていたが、今回はその差が見られない。夕食にも生協食堂を利用する学部が増えたということである。

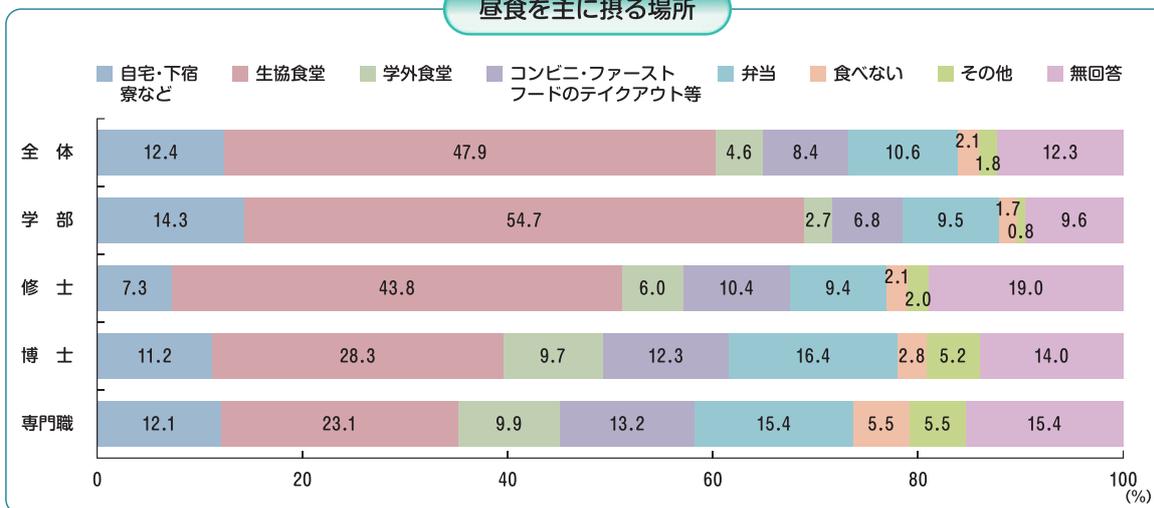


朝食を主に摂る場所

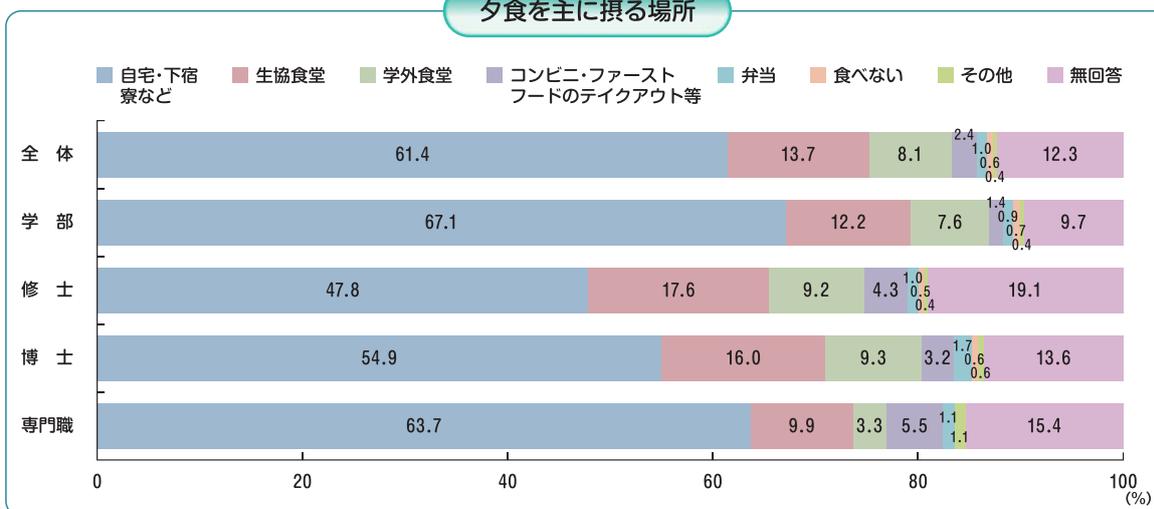


生協食堂の利用頻度は、《毎日1食》が24.2%、《毎日2食》が28.8%、《週に2-3回》が24.3%、《殆ど利用しない》が22.0%となっている。利用しない最大の理由は《混雑》であるが（26.3%）、2年前31.1%、4年前36.6%と比べて多少下がっている。

昼食を主に摂る場所



夕食を主に摂る場所

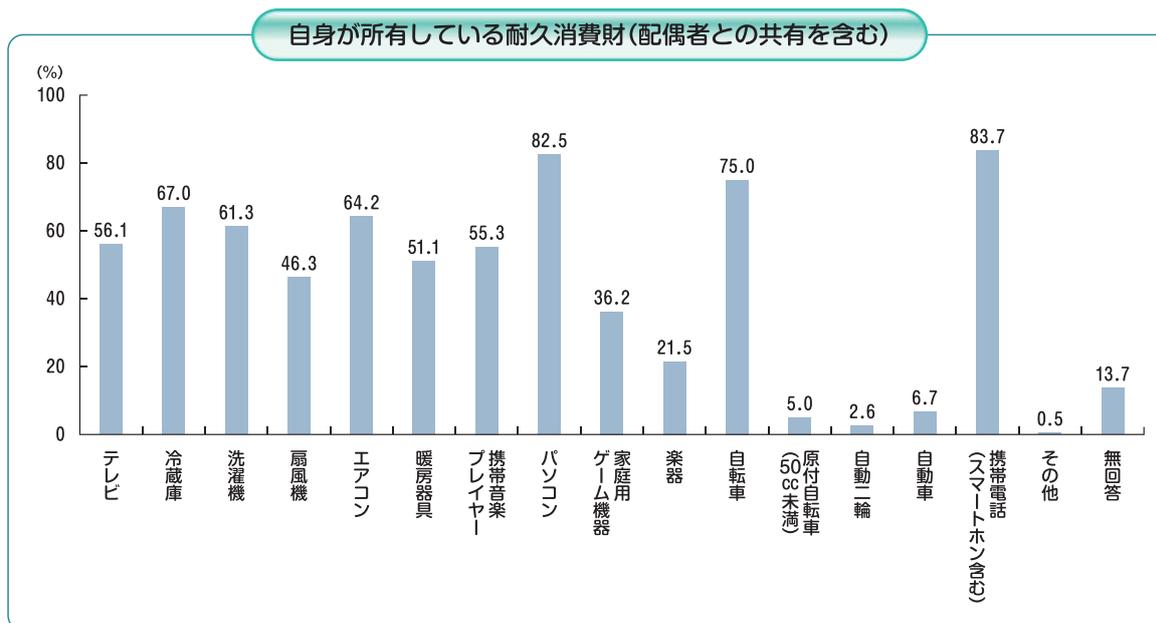


M. 耐久消費財について

◆ 博士でも大きい家計支持者の負担 ◆

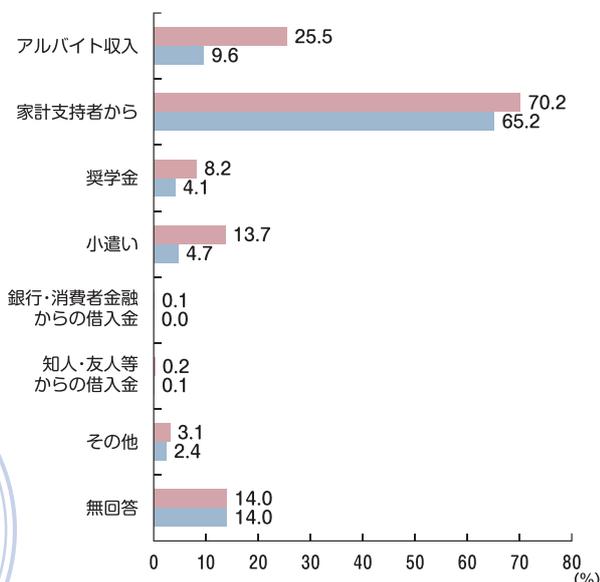
携帯電話などの所有率はその他、無回答を除くと83.7%。パソコン82.5%、自転車75.0%がこれに続く。いずれの数値も、2年前と比べて、若干ながら減少している。

これらの耐久消費財の購入費用を家計支持者が負担する割合は、学部で78.9%、博士でも49.9%を占めている。博士ではアルバイトも32.2%であり、奨学金の占める割合は17.5%に過ぎない。

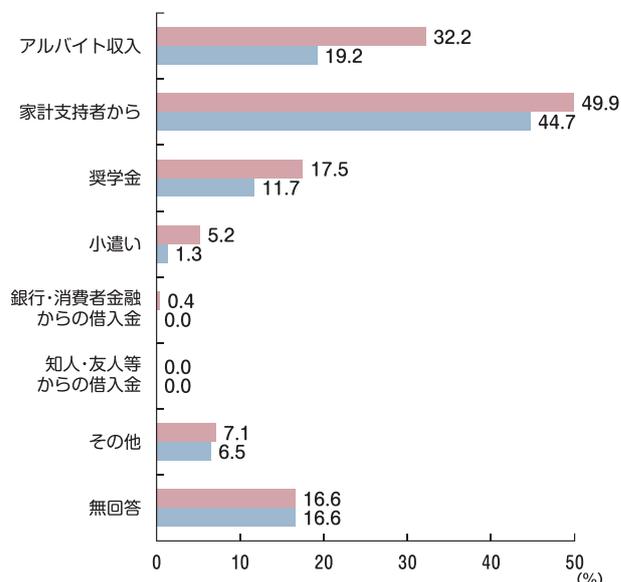


パソコン所有者の95.2%が自宅からインターネット接続を行っている。このうち約4割の学生が1時間から3時間接続、3時間以上の接続も25.2%いる。ただ、この時間にはスマートホンの接続が含まれている可能性もある。

耐久消費財の購入費用の出所【全体】



耐久消費財の購入費用の出所【博士】



N. その他

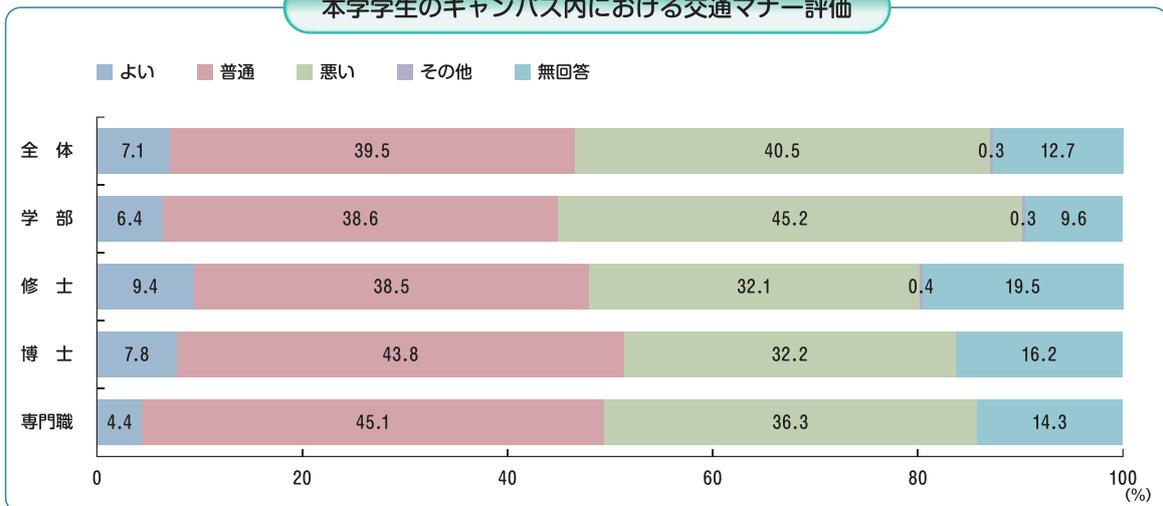
今回の調査でも「本学学生のキャンパス内外における交通マナー」について学生自身がどう思っているのかを尋ねている。調査方法が前回までの無作為抽出法からWebを用いた全員対象法へと変わったが、結果は概ね変わらず、《良い》が7.1%、《普通》が39.5%、《悪い》が40.5%であり、半数近くが本学学生の交通マナーが悪いと考えている。



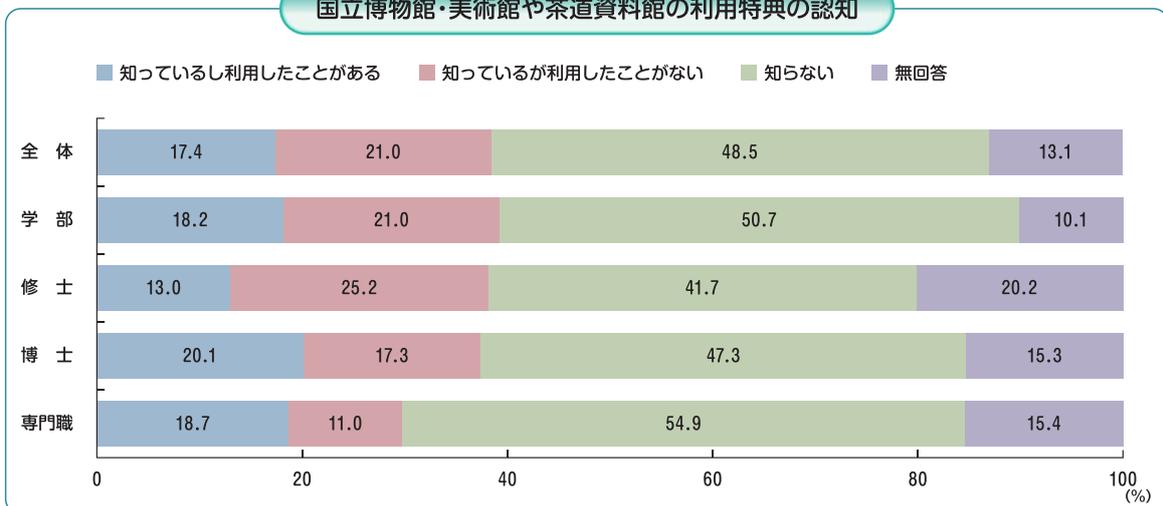
国立博物館・美術館や茶道資料館の利用に特典があることについて知っている者は全体の38.4%であり、前回より10ポイント以上減少したが、そのうちの半分近くの者が実際に利用していた。

「学内での宗教等の勧誘を受けた経験」については、全体では17.4%が《自分が勧誘を受けた》、5.5%が《友人が受けた》と答えている。また大学院に比べて学部の方が、勧誘を受ける比率が高い傾向がみられた。両方を合わせた割合を前回と比較すると、自分または友人が勧誘を受けた割合は47.6%から22.9%へと半減した。

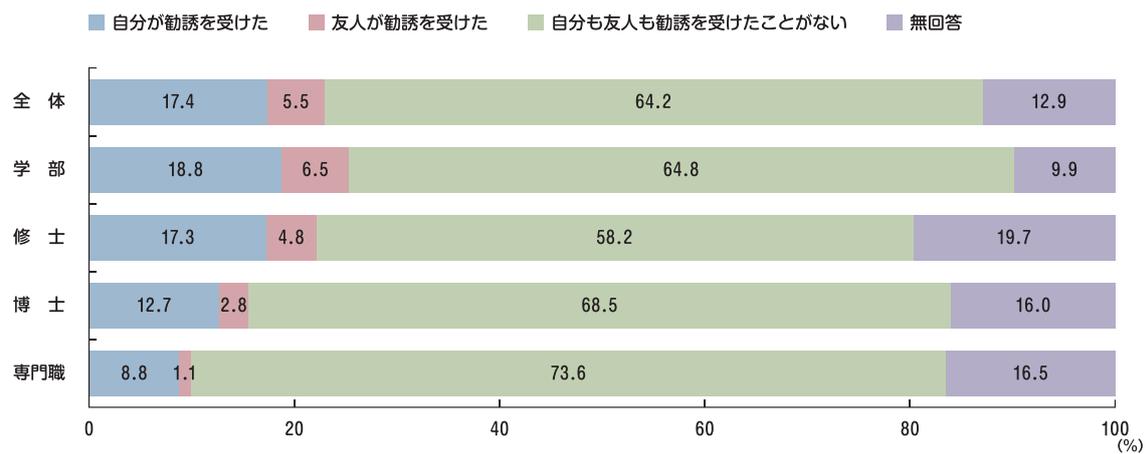
本学学生のキャンパス内における交通マナー評価



国立博物館・美術館や茶道資料館の利用特典の認知



学内で宗教等の勧誘を受けた経験の有無



学生生活実態調査の利用について

本調査の集計結果は、今後の学生支援に関する施策を進めるため、参考とし活用されます。具体的には、図書館の利用時間延長や、学内トイレの改修、生協等の福利厚生施設の整備や、北部グラウンドの人工芝化、駐輪場の整備といった学内施設の充実などが挙げられ、多岐に亘り活用されています。



京都大学学生生活白書

平成27年度《学生生活実態調査》のまとめ ー概要ー

平成28年7月発行

編 集 平成27年度学生生活実態調査委員会

委員長 長谷あきら（理学研究科教授）

委 員 西平 直（教育学研究科教授）

笠井 正俊（法学研究科教授）

石濱 泰（薬学研究科教授）

加納 学（情報学研究科教授）

金 広文（経営管理研究部・教育部教授）

発 行 京都大学教育推進・学生支援部 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/campus/report.html>